

並行する2列の小ピット列が検出された。この小ピットは宮田栄二氏の提唱する「スライス調査」(宮田2004)とまではいかないが、遺構を半裁し横方向からの削り出しによって検出している。その結果覆土はほぼ単純で、色調や硬さについても変化は感じられなかった。下方になるにつれて細くなる形態を示し、先を尖らせた直径8cm~9cmの杭を打ち込んだものと考えられる。また、網掛けの2つの小ピットは、おとし穴状遺構平面プラン検出時より色調の違うピットとして確認されていた。当初はおとし穴状遺構埋没後の後世の遺構と理解し調査を進めたが、ピットの形状・深さ・位置などを比べると他の小ピットと差異は見られない。したがって、おとし穴状遺構に伴うものと考えられ、底面に打ち込まれた杭の上方部分の痕跡であろう。他の小ピットより何らかの理由で残存状態が比較的良好であったと考えられる。この2つのピットはおとし穴状遺構平面プラン検出時の位置と底面に残された位置ではややずれている。底面に打ち込まれた杭の痕跡からはいずれも垂直に近い傾きで設置されており、位置のずれた理由としては、おとし穴状遺構埋没時に真っ直ぐであった杭が腐食崩壊により倒れてしまった。または、当初より曲がった杭を使用していた。などが考えられよう。この杭の形状の差はおとし穴状遺構を使った狩猟方法の差にもつながるものであり重要である。

2号は半分程度しか検出できていないが、ほぼ1号と同様の形態を示すものであろう。遺構内からは黒曜石の碎片が1点検出されている。深さは約40cmが残存しており、短軸方向の断面から、側面がややオーバーハングしている状況が見られる。底面の小ピットは1号よりもかなり密に検出されており、また、長軸方向の中央部に直線的に1列検出されている。1号とは異なる配列が見られる。

3号は検出プランは細長い楕円形で、長軸0.85m、短軸0.25m、深さ0.2mをはかり1号の約半分の大きさである。底面にピットを持たず形態的には1号・2号と大きく異なる。今回おとし穴状遺構として取り上げた理由は、1号・2号と同時に検出され、また、覆土の状況もまったく同一であったためである。(辻田)

註

1 第3章第2節(註1)参照

参考文献

宮田栄二2004「鹿児島県のおとし穴状遺構について」『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』九州縄文研究会
 今村啓爾1994「陥穴(おとし穴)」『縄文時代の研究』2生業 雄山閣出版株式会社

第5表 おとし穴状遺構計測表

図番号	遺構名	時代・時期	遺構内遺物	サイズ(m)長×短×深	上面プラン	底面のピット数
19	1号	アカホヤ降灰以降	なし	1.40×0.62×0.20	長楕円形	11
	2号	アカホヤ降灰以降	黒曜石碎片	0.90(以上)×0.65×0.40	長楕円形	9以上
	3号	アカホヤ降灰以降	なし	0.85×0.25×0.20	楕円形	0

第6章 奈良・平安時代

第1節 古代条里遺構関連の調査（第20～21図）

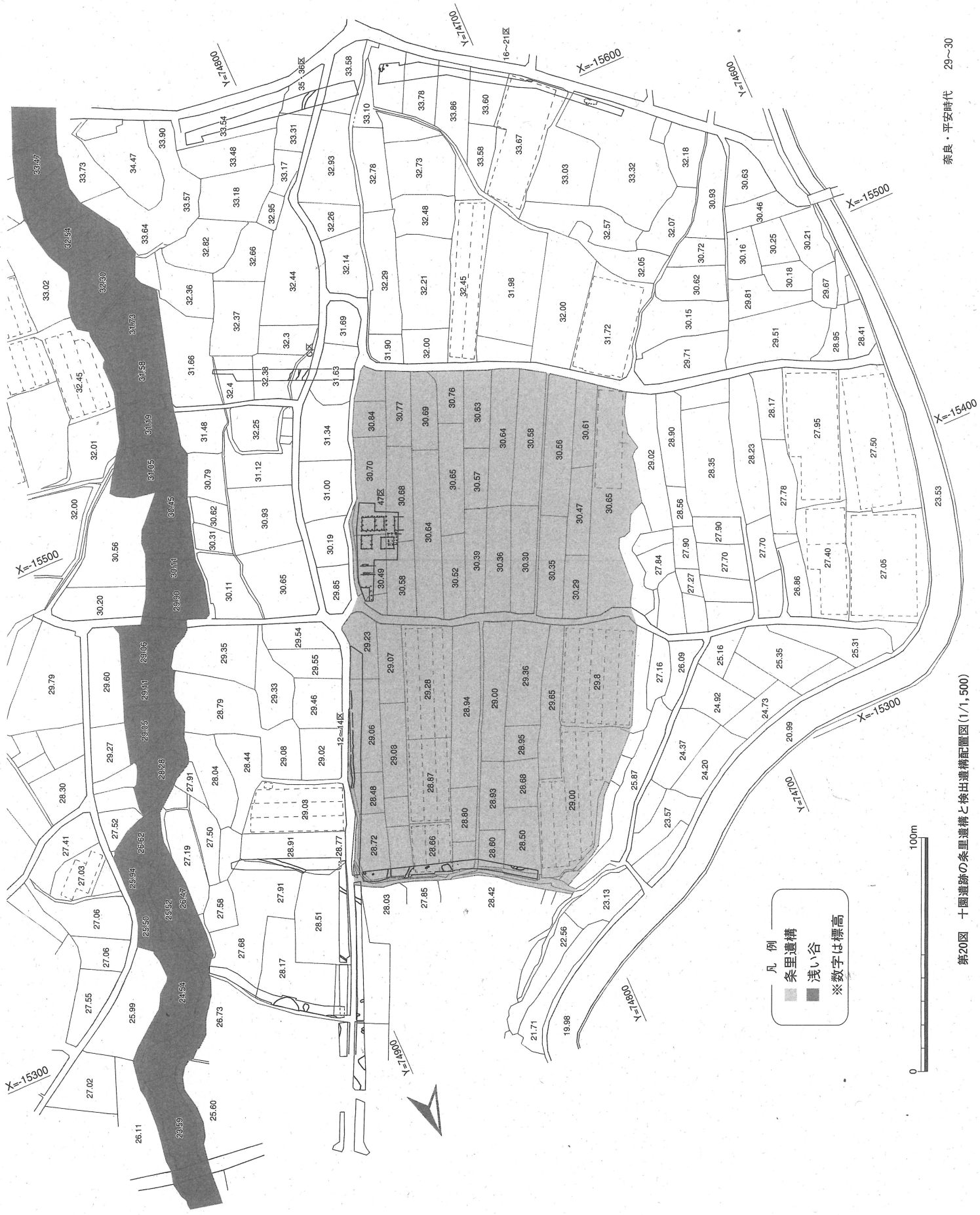
第1章第3節（2p）で紹介してきたように、十園遺跡は複合遺跡であり発掘調査においても複数の時代の遺構・遺物が多数検出されている。1～11区、22～38区では弥生時代中期・後期の竪穴住居跡や環濠、甕棺墓群などが発見され、12～14区、39～47区、35区、C区、16～21区では古代の掘立柱建物、製鉄遺構、水路、自然河川などが発見されている。また、縄文時代のおとし穴状遺構や(25P)遺物、旧石器時代の遺構・遺物（第4章）も発見されている。

十園遺跡における古代の最大遺構として、圃場整備前に作成された地形図に記録された条里遺構（第20図薄いアミ部分）が挙げられる。十園遺跡内で条里遺構と思われるものは、47区から西側へ広がる一面と、12～14区から西側に広がる一面の合計二面である（第20図）。内部にのこる畔の方向性は南北方向を示し、その幅もおよそ平行しながら並んでいる。47区で検出された建物群の主軸は条里遺構の主軸と一致している。このことは、条里遺構が47区で検出された建物の時代までさかのぼる傍証となる。47区周辺が最も高い条里面で、その北側にある平坦面は低いレベルで作られている。土黒川に突出した河底との高低差のある丘陵西端を巧みに利用し平坦面を得ているが、その東や南へ条里遺構が見られないのはなぜだろうか？

この疑問にはこれまでの調査成果と地形的な制約が答えてくれる。C区や35区においては奈良・平安時代では自然河川や水路があり、水回りの都合上、条里遺構の残る東側には広い平坦面を得ることが難しかったのではなかろうか。実際に35区周辺では河川堆積の痕跡が確認され、61p第48図に残るような旧河川の痕跡が確認できた。検出された河川堆積物中には弥生時代から中世までの遺物が層位的に検出できる部分もあり、長い間にわたり自然河川や水路として利用されていたことが確認できる。地形的には条里遺構の東側はヒトデ状の丘陵先端部分がいくつも並んでおり、旧河川もあり平坦面の得やすい状況にない。旧地形図で条里より浅い谷となる部分に濃いアミをかけてみた（第20図）が、そのことをよく物語っている。

さて、条里遺構をこの二面に限って見たわけであるが、条里遺構が広がる可能性として16～21区北側にみられる条里遺構に並行する短冊状の畔に注目してみたい。16区から21区にかけては西側（土黒川の方向）へゆるく傾斜しており、100m四方の平坦面を得るには容易な地形条件ではない。このあたりでは63p第51図や65p第52図に示すような中世の製鉄炉関連遺構が検出されており、土地の利用状況が条里遺構の残る地点とは異なる様子である。実際に39～47区にかけて南北方向に走る近世～近代の溝（一部中世も残る）では、鉄滓の堆積層が複数箇所存在した。第52図や第53図に示すような製鉄炉の規模がどの程度であったのかを知る手がかりとなろう。また、36区自然河川は古代のある時期に、土師器を供献する祭祀（61P第48図）が行われている。その自然河川は埋め立てられた形跡がなく、C区で検出された溝（60P第46図）も建物や条里遺構の方向性とは異なっている。このため、これらの調査地点の周囲は、古代における条里施工の範囲外にあった可能性が高い。

第21図は47区の建物群と12～14区で検出された直線的な水路（SD01）、C区で検出された断面台形の水路（SD04）の位置関係を示したものである。SD01は南へ延長すると建物群の東脇に位置する。発掘では建物群の東脇は現代まで何度も水路として利用されていた様子で、同時代の水路を検出することはできなかった。また、SD01の北側への延長線上では22～38区の周辺（条里遺構の北端付近）で西へ直角に折れ曲がる中近世の水路が確認できた。この水路もまた、古代からの流れを引き継いでいるものと思われる。



凡例
 ■ 栞里遺構
 ■ 浅い谷
 ※ 数字は標高



第20図 十国遺跡の栞里遺構と検出遺構配置図(1/1,500)

C区SD04は、第21図のように条里に軸を合わせるような水路とは違い、条里遺構に平行しない方向性を持っているがこれも同時代の水路である。二本の水路の直接的な関係は今後の調査に期待しなければならないが、いずれも溝掃除や底浚いなどの浚渫作業は随時行われていた様子である。このためよく管理の行き届いた水路と考えておいてよさそうである。おそらく建物群周辺への土石流の流れ込みや水害などの防止、水田や畑地への灌漑用水などの機能も果たしていたものであろう。

一小 結一

さて、これまでの調査により得られたデータを整理すると以下ようになる。条里遺構の見られる地区は大型建物群や直線的な水路などが整備された。条里遺構の見られない地区で明確な古代の遺構が検出されたのは、C区溝と35区自然河川上の祭祀行為である。16～21区では中世の製鉄関連遺構や多数のPitが検出されているが、古代の明確な遺構はほとんどみられない。さきほど条里遺構とした二面の外側では、水路や河川に係る古代の遺構が検出されているが、建物や土坑などの検出はみられない。検出された古代の遺構密度や性格などをみると、条里遺構の中と外では明確な区分ができそうである。以下の節でその特徴的な遺構を紹介していく。(竹中)

第2節 大型建物群と柱穴出土遺物

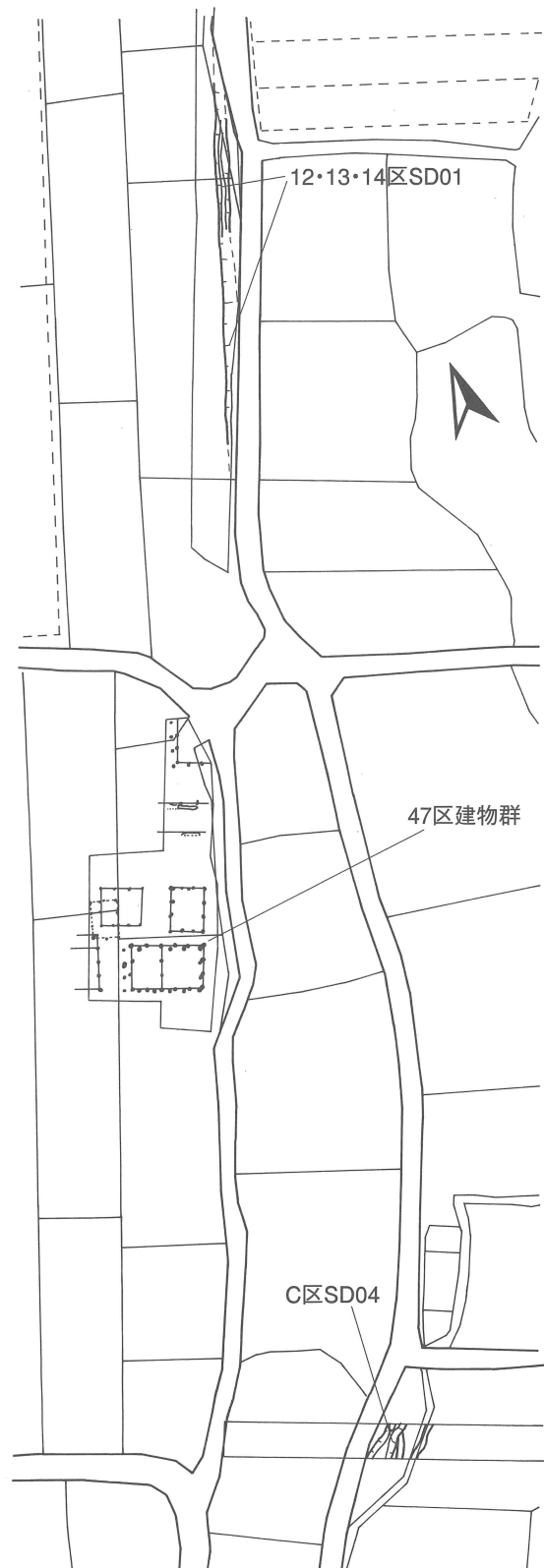
(第21～29図)

はじめに

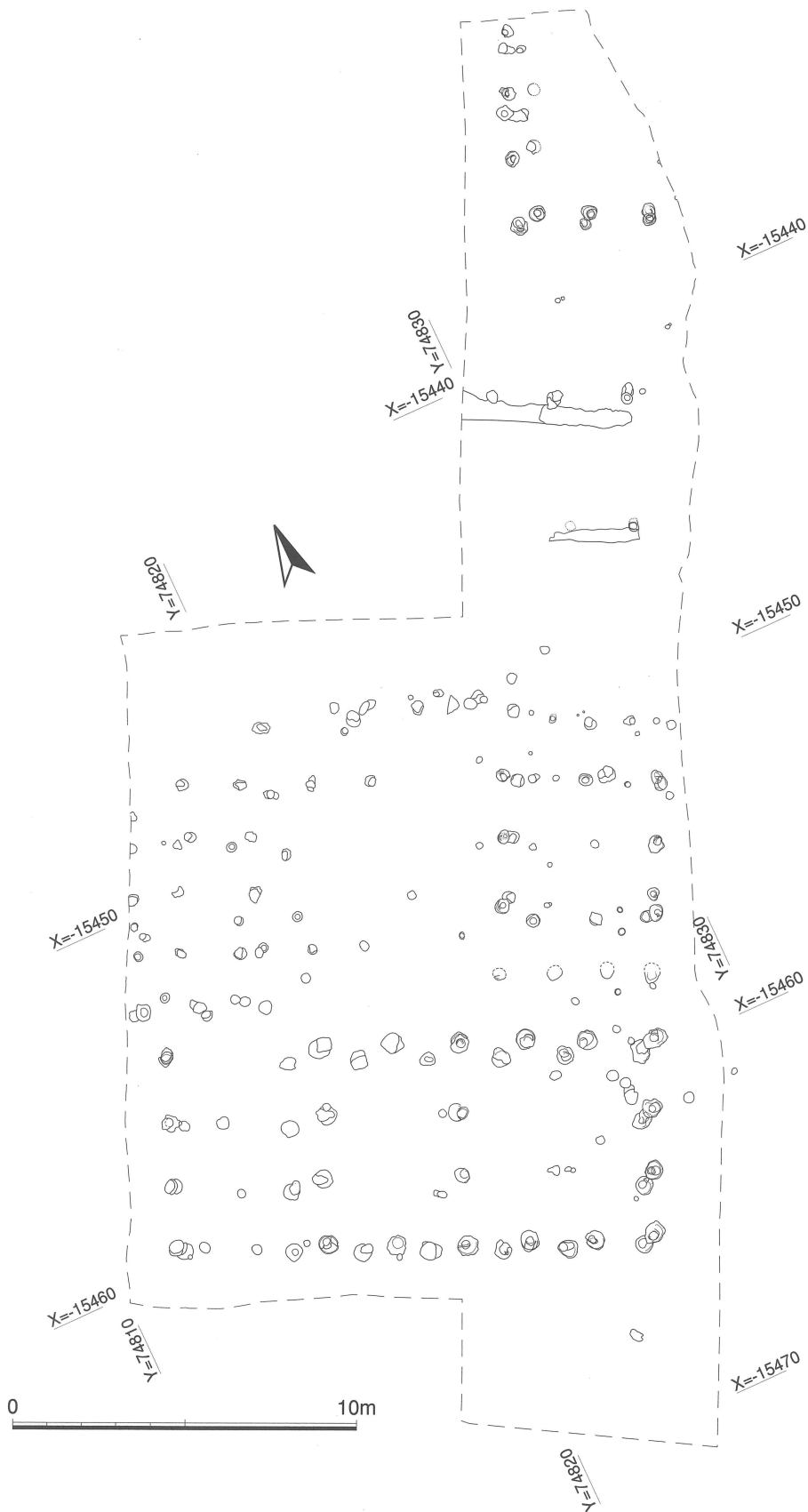
47区では黄褐色粘質土層上面で柱穴や溝が検出されており、規格性の高い5棟の建物群と2本の柵列が検出できた。ここではその5棟を中心に紹介していく。

1) 建物群の構成 (第22～23図, 第6表, 図版2)

47区で検出された柱穴の総数は212個である(第22図)。調査面積はおよそ520㎡で、柱穴の密度は4㎡当たり1.6個と非常に高い。調査段階で確認できた構造物は(第23図)、掘立柱建物として構成されるものが6棟、柵として構成されるものが3列である。うち2列の柵の南側にはいずれも溝状のくぼみが確認されている。掘立柱建物6棟のうち5棟はほぼ同じ方位を基準としており、立替の方向も同じ方向へほぼ同じ幅で移動している。各建物間の距離関係は、第23図に数字で示しているが、以下のとおり。SB



第21図 47区建物群と水路の位置関係(1/1,000)

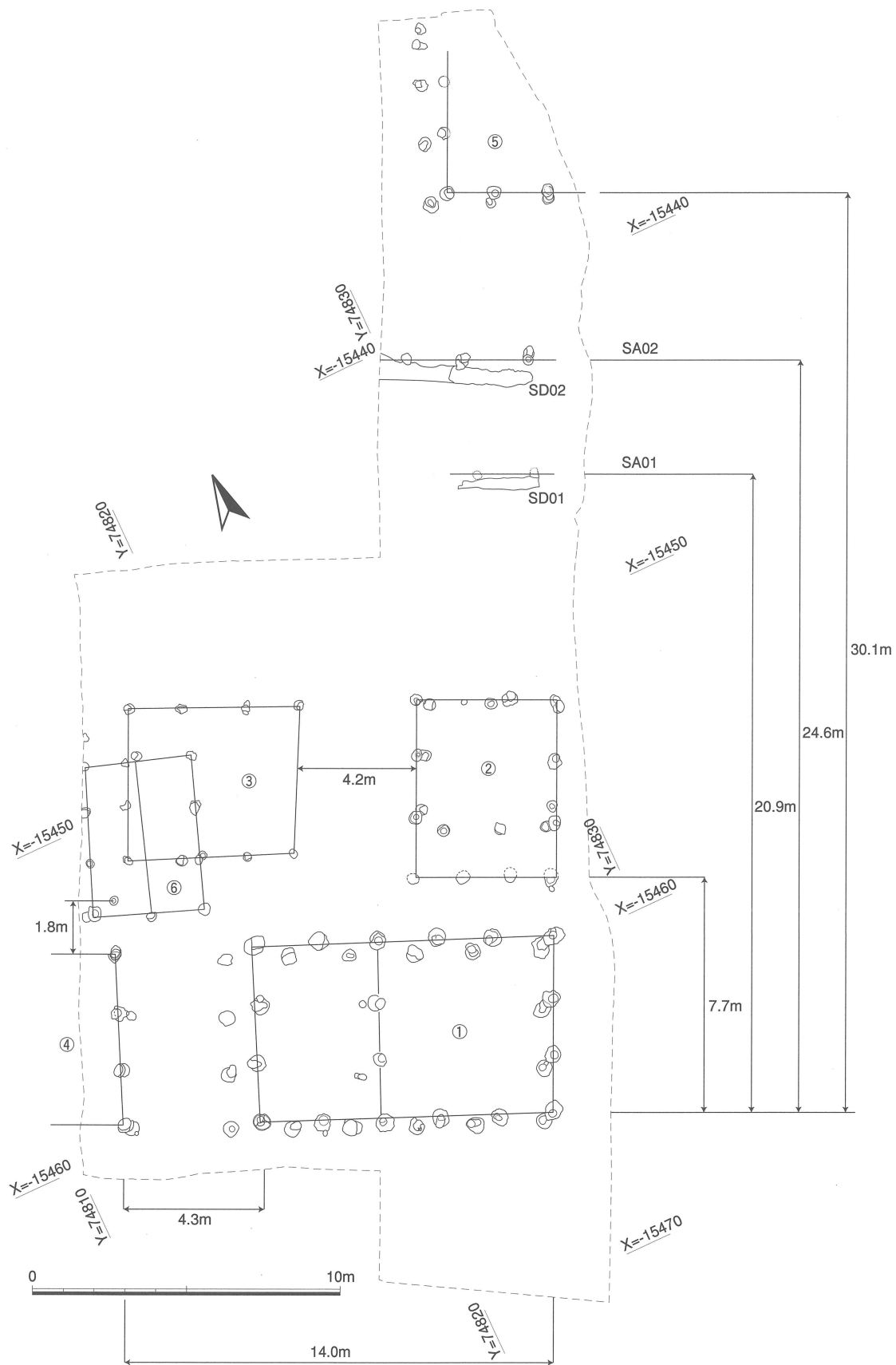


第22図 47区検出柱穴(1/200)

01とSB05との距離は30.1m(約100尺), SB01SB02との距離は7.7m(約27尺), SA01とSB01とは20.9m(約70尺), SA02とSB01とは24.6m(約82尺), SB01とSB04との距離は4.3m(約14尺), SB02とSB03とは4.2m(約14尺)。調査範囲の南北方向での直線距離は40m以上あるが, 比較的規則的な数字が得られる。南北方向ではSB01とSB05とは南北方向の主軸を共有し, 東西方向ではSB01とSB04との柱筋が通り, これら5棟の建物間には共通の規格が存在したことが想定される。

建物構造はすべて側柱構造の掘立柱建物で, SB01は5間×3間で東側内部を3間四方に分割する仕切り柱が確認され, SB04はSB01と同様な規模で西側へ構築されたものと思われるが, SB01とは違い北側に庇が付く(第26図)。SB02・03は3間×3間の構造で, SB05は3間以上×2間以上の構造に復元できる。柱痕跡はすべて円形である。

(竹中)



第23図 47区検出建物群・柵列(1/200)

第6表 47区検出建物群構成表（すべて側柱構造の建物）

建物番号	桁行×梁行	規模(m)括弧内は旧建物	南北柱列主軸・括弧内は旧建物	備考
SB01(旧SB01)	5×3 (5×3)	9.6×5.8 (10.2×5.7)	N-24.5°-E (N-24°-E)	間仕切り柱 三間四方
SB02(旧SB02)	3×3 (3×3)	5.7×4.5 (5.3×4.35)	N-24.5°-E (N-25°-E)	
SB03	3×3	5.5×4.9	N-24°-E	柱筋を旧SB02や旧SB01と共有
SB04(旧SB04)	5?×3 (5?×2)	?×5.7 (?×3.8)	N-24.5°-E (N-24°-E)	北面庇構造
SB05(旧SB05)	3~×3~ (3~×3~)	3.7~×3.4~ (5.7~×3.8~)	N-24.5°-E (N-22.5°-E)	主軸差の新旧が大きい
SB06	3×2	4.9×3.5	N-21°-E	

第7表 47区検出柵列構成表

柵列番号	柱間(m)	検出長(m)	東西方向主軸	備考
SA01	1.8	1.8	E-24°-S	建物群に平行
SB02(旧SB02)	2 (2)	4 (4)	E-24.5°-S (E-22°-S)	建物群に平行

2) 個別建物の紹介

47区 SB01 (第26図 図版2)

5間×3間の側柱構造の掘立柱建物で東西方向が桁行きとなる。検出建物中で最も規模が大きく、柱掘り方は60~70cmの不正円形である。すべての柱穴で中心に柱痕跡(25cm程度)が確認でき、柱を抜かれた柱穴でも中心に柱がすえられていたことが確認できた。柱穴底面は柱をすえる部分のみ一段掘りくぼめ、黄褐色粘質土を敷かれてその上に柱がすえられたことが断面観察で確認できた。柱掘り方には、柱をすえた後に黄褐色粘質土と黒褐色土の混入土と黄褐色粘質土の割合の多い二種の土を交互に入れ込み、水平に突き固めながら柱を固定している。

47区 SB02 (第27図 図版2)

3間×3間の南北方向が桁行きとなる側柱構造の掘立柱建物である。SB01の東側柱と柱筋が通り、SB03とは北側の柱筋が通る。検出面が低い部分で柱穴の残存は悪く、P17・18の前後関係がつかめなかった。掘り方内部の状況はSB01とほぼ同じであるが、浅く柱のすえ方などはSB01と同じやり方で、柱をすえる部分に黄褐色粘質土を敷き、割合の異なる混入土を交互に入れながら柱周りを固めている。柱痕跡は径20cm程度である。

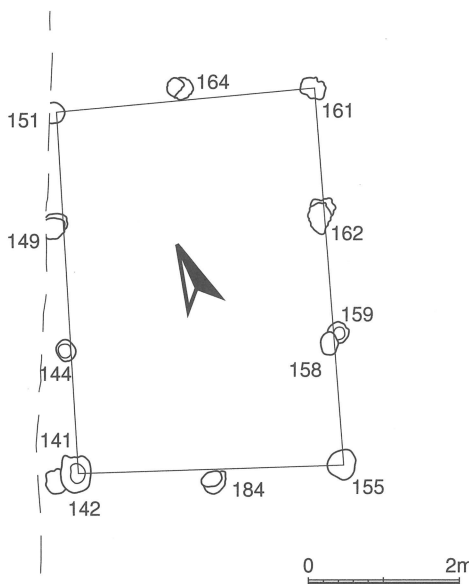
47区 SB03 (第25図 図版3)

検出面で確認したもので、柱穴の調査などは行っていない。

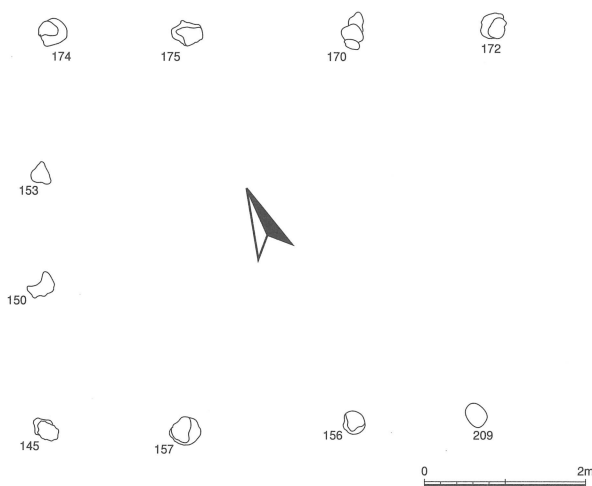
47区西側は先行する圃場整備に伴う工事により検出面まで重機の走った痕跡が確認され、検出された柱穴も歪みを生じていた。P174などをみると柱痕跡は直径20cm前後となり、SB02と同規模の建物で、東西方向が桁行きとなる。

47区 SB04 (第26図 図版3)

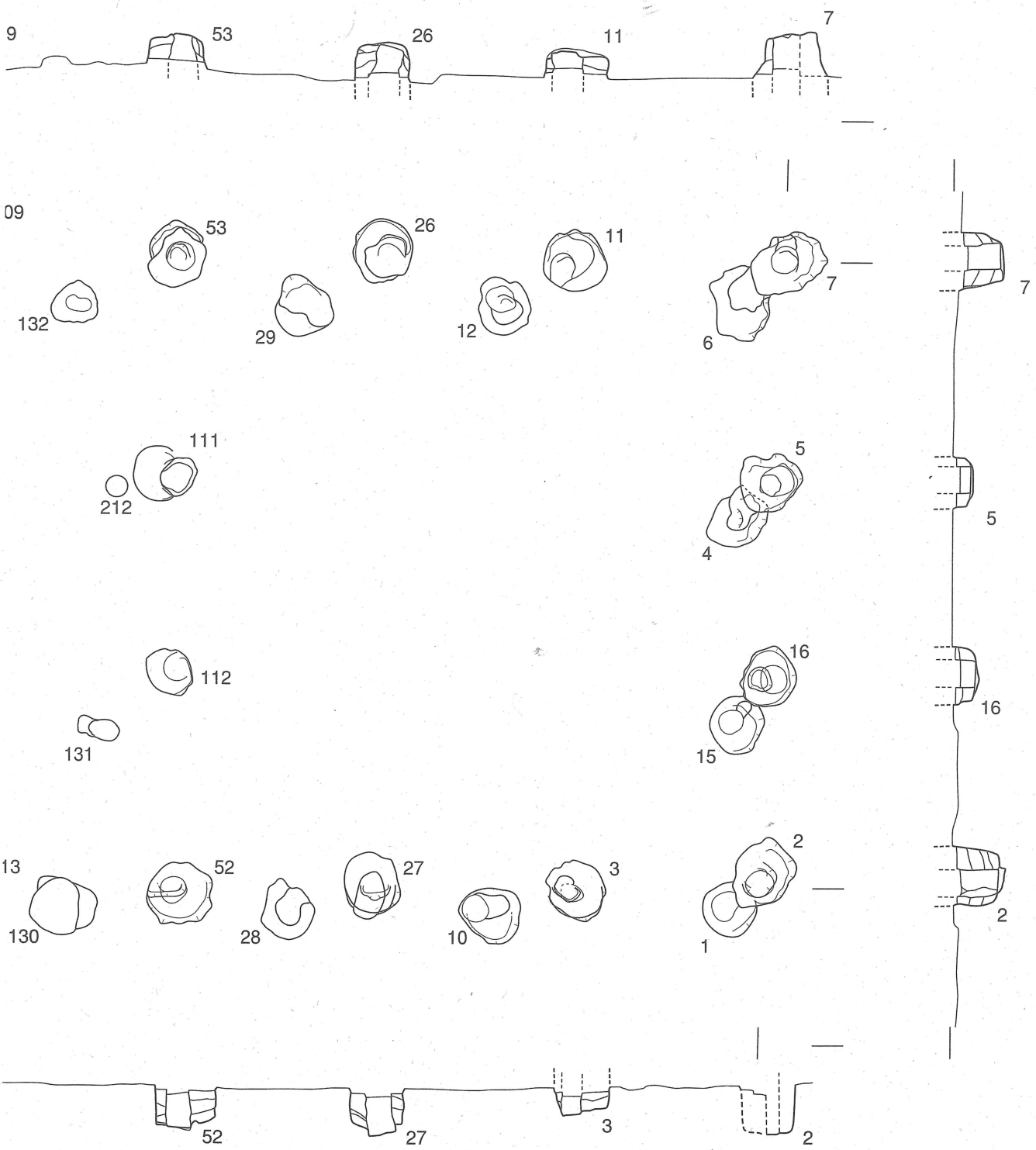
検出面で確認し、P127のみは柱穴の調査まで行い、第29図に示すような遺物が検出された。柱掘り方は50cm前後とSB01より小さいが、柱痕跡



第24図 47区 SB06平面図(1/100)

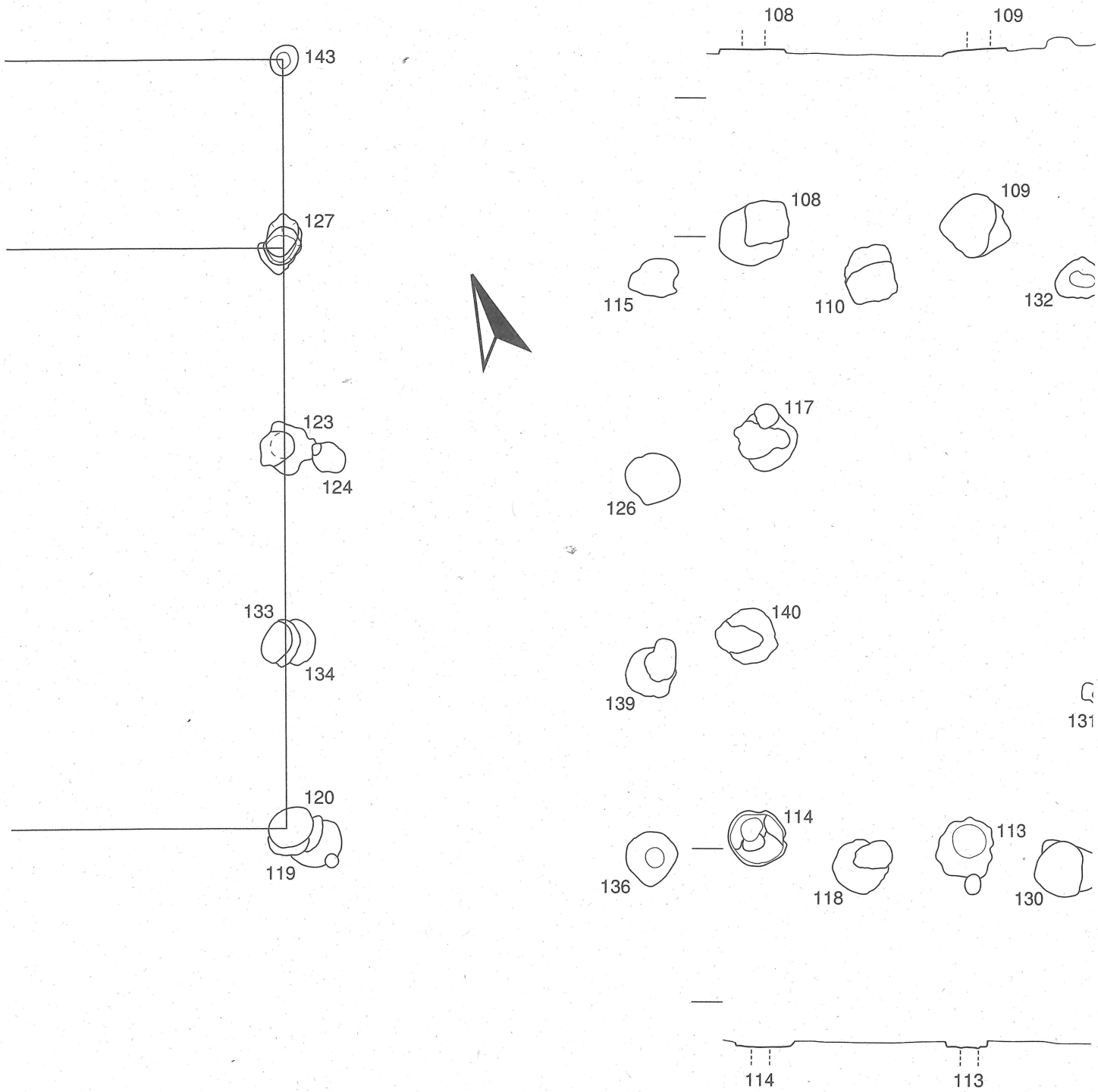


第25図 47区 SB03平面図(1/100)

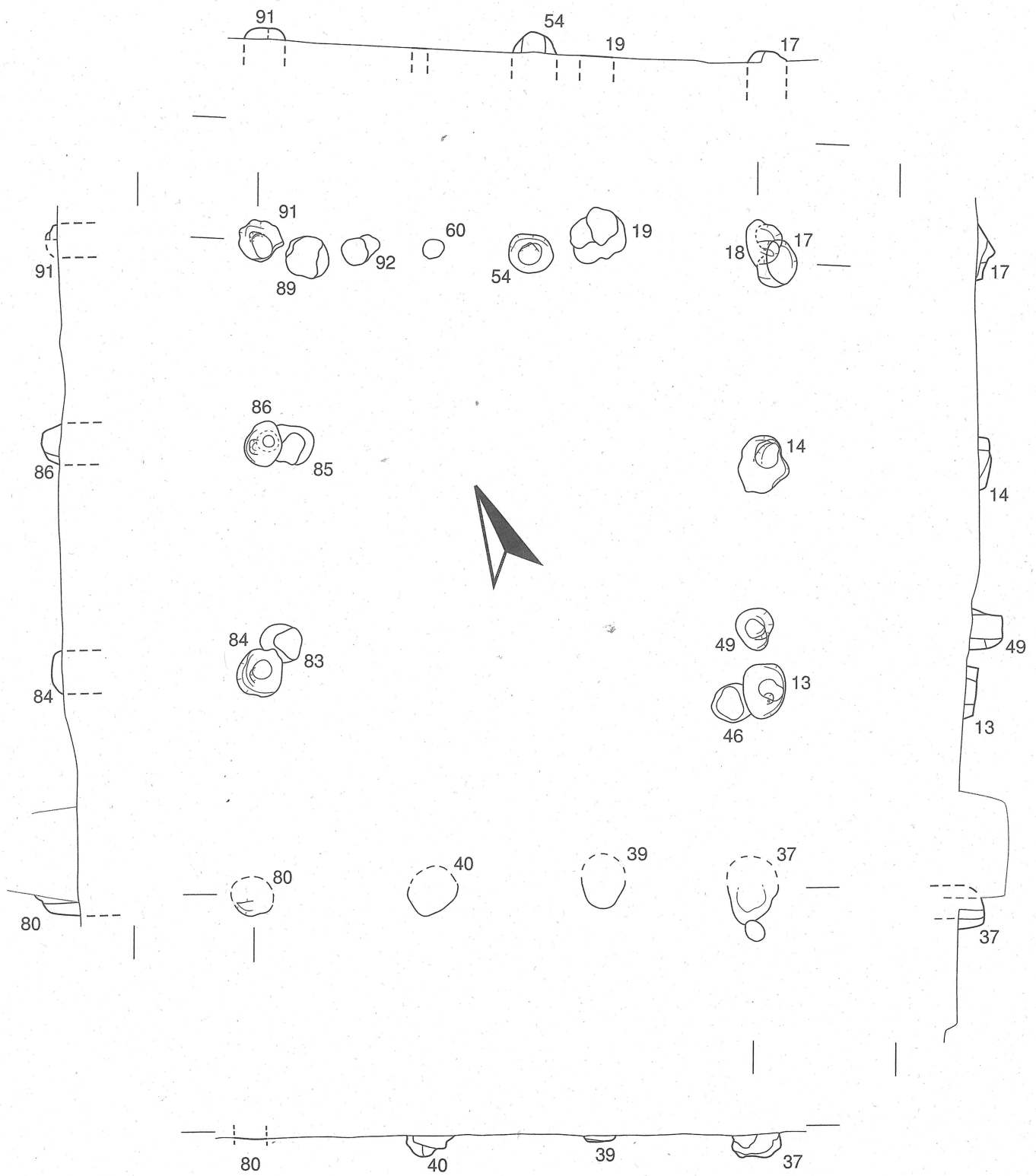


0 2m

304平面図・セクション図(1/50)



第26图 47区 SB01·SB04平面图

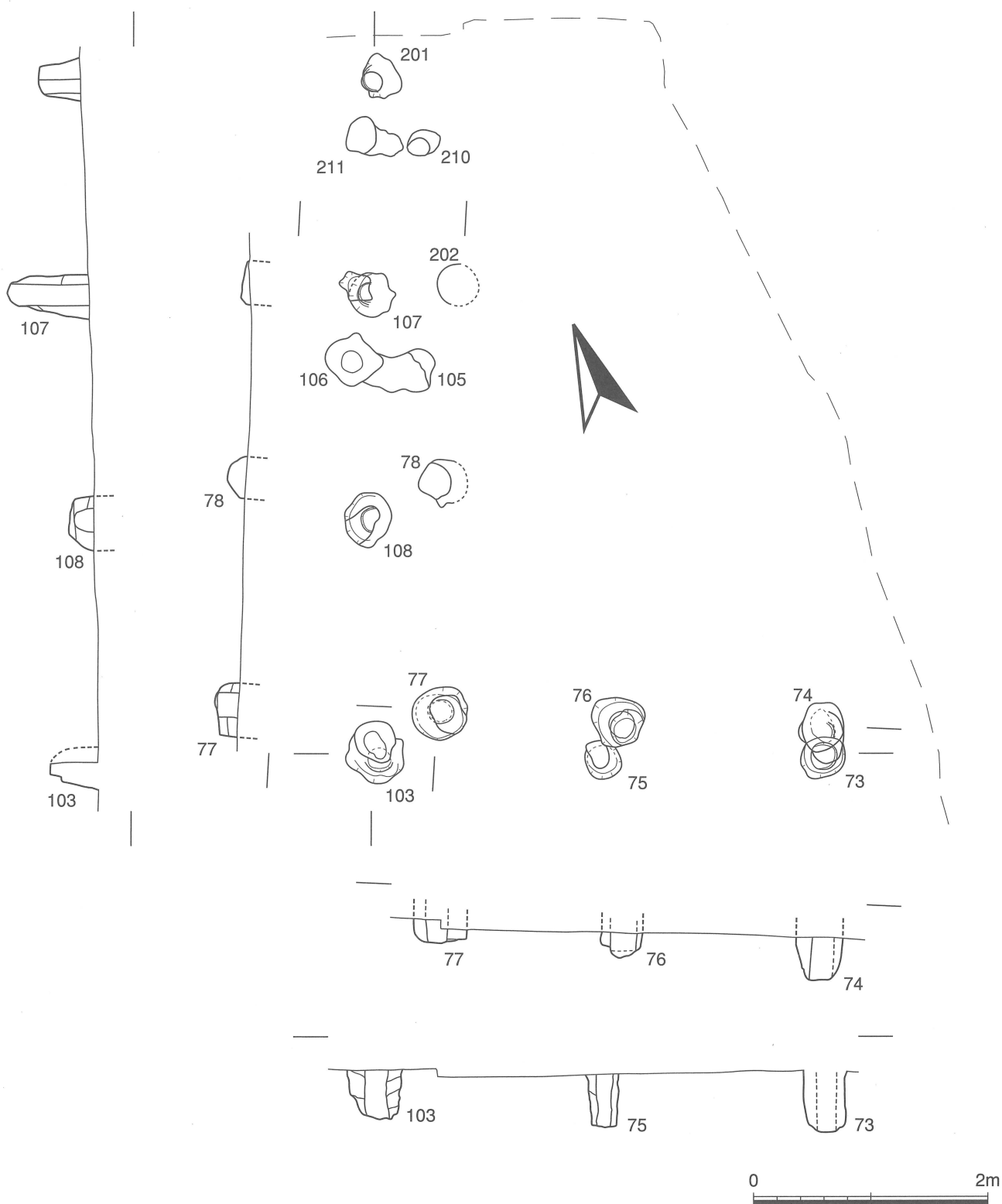


第27図 47区 SB02平面図・セクション図(1/50)

はP 127やP 123では直径25cm前後となる。規模的にはSB01に順ずるものか同程度のものとなる。北側に柱筋の通るP 143があり、柱痕跡は20cm前後となり庇として考えておく。

47区 SB05 (第28図)

調査区北端で確認されたもので、柱間の長さから南北方向が桁行きとなる。道路部分にあたるためすべての柱について調査を行った。SB01と柱のすえ方は同じであるが、深さが統一されていない点



第28図 47区 SB05平面図・セクション図(1/50)

が特徴的である。いずれも柱をすえる部分には黄褐色粘質土を敷いている。柱掘り方は直径40cmほどの不正円形である。柱痕跡は直径20cmほどである。

47区 SB06 (第24図)

検出面で確認したもので、柱穴内部の調査などは行っていない。南北方向が桁行きとなり、棟持柱構造となる。柱痕跡は直径20cm程度で、柱掘り方はSB02とほぼ同じである。

3) 掘立柱建物群の出土遺物 (第23図①~⑥・第29図 第8・9表)

ここでは、47区において検出された建物にかかわる柱穴から出土した遺物を中心に報告していく。柱穴からは第8表に示すとおり、小片を含め多くの遺物が出土している。前節で報告してきた建物に関わる柱穴との関連は、第9表左2列目に示すとおりである。各建物と柱穴番号の対応については、各建物の個別実測図を参照していただきたい。

○以下に建物に関わる遺物のみを整理してみた。(P43第9表)

47区 SB01新に関連する遺物は、土師器甕では口縁部片(P2・26(第29図)・27・109(第29図)) 胴部片(P1・7・16・26・37・52・140)、土師器坏では口縁部片(P7・26・140) 底片(P27:ヘラ削り平底)。この他に竈片(P7)、礫(P2・114)、鉄滓(P114)もある。須恵器では高盤口縁部片(P109)があり、柱抜き取り穴上部からの出土である。

47区 SB01旧に関連する遺物は、土師器小片(P29)が出土している。

47区 SB02新に関連する遺物は、P37で土師器甕胴部片が出土している。

47区 SB03に関連する遺物は、土師器甕胴部片(P145・153)、須恵器坏口縁部片(P153)が出土している。

47区 SB04新に関連する遺物は土師器甕胴部片(P120・123・133)、土師器坏(P120・123・127(第29図))、土師器高盤片(P123(第29図)・127)、須恵器高盤(P127)が出土している。そのうちP123とP127出土の土師器高盤片2点は同一固体と思われる。

47区 SB05新に関連する遺物は土師器甕胴部片(P74・77)、須恵器坏片(P74)が出土している。

47区 SB05旧に関連する遺物は土師器坏片(P107)が出土している。

第8表 47区柱穴検出遺物構成表

土師器					須恵器				
甕片			坏片	ほか	甕片			坏片	礫
口縁	胴部	底部			口縁	胴部	底部		
9	33	0	14	34	0	1	0	7	4

○出土遺物には出土状況により3種に分類できる。

- ① 柱掘り方内に柱を埋める土砂とともに入れ込まれたもの
→ 建物の築造時期に極めて近い遺物を含んでいる可能性がある。
- ② 柱痕内部に入り込んだもの
→ 建物廃棄以降の遺物が入り込む余地がある。
- ③ 柱抜き取り穴に土砂とともに入れ込まれたもの
→ 建物廃棄直前までの遺物を含んでいる可能性がある。

出土遺物は小片も含んでいるが、可能な限り器種と点数を確認した(第9表)。①の出土状態が最も多く19例、②の出土状態は11例、③の出土状態は6例となる。出土する器種では土師器が甕胴部片33点、坏片14点、小片が34点、須恵器では甕胴部片1点、坏片7点。破片の大きさでは、柱掘り方や柱痕に含まれるものは2cm四方以下の小片がほとんどで、柱抜き取り穴のものは比較的大きめの破片を含んでいる。とくにP127では10cm四方以上の大き目の破片で、意図的に投げ込まれた印象を受ける(図版10)。土器以外でも安山岩の礫や鉄滓などが柱痕や抜き取り穴から出土している。建物①や

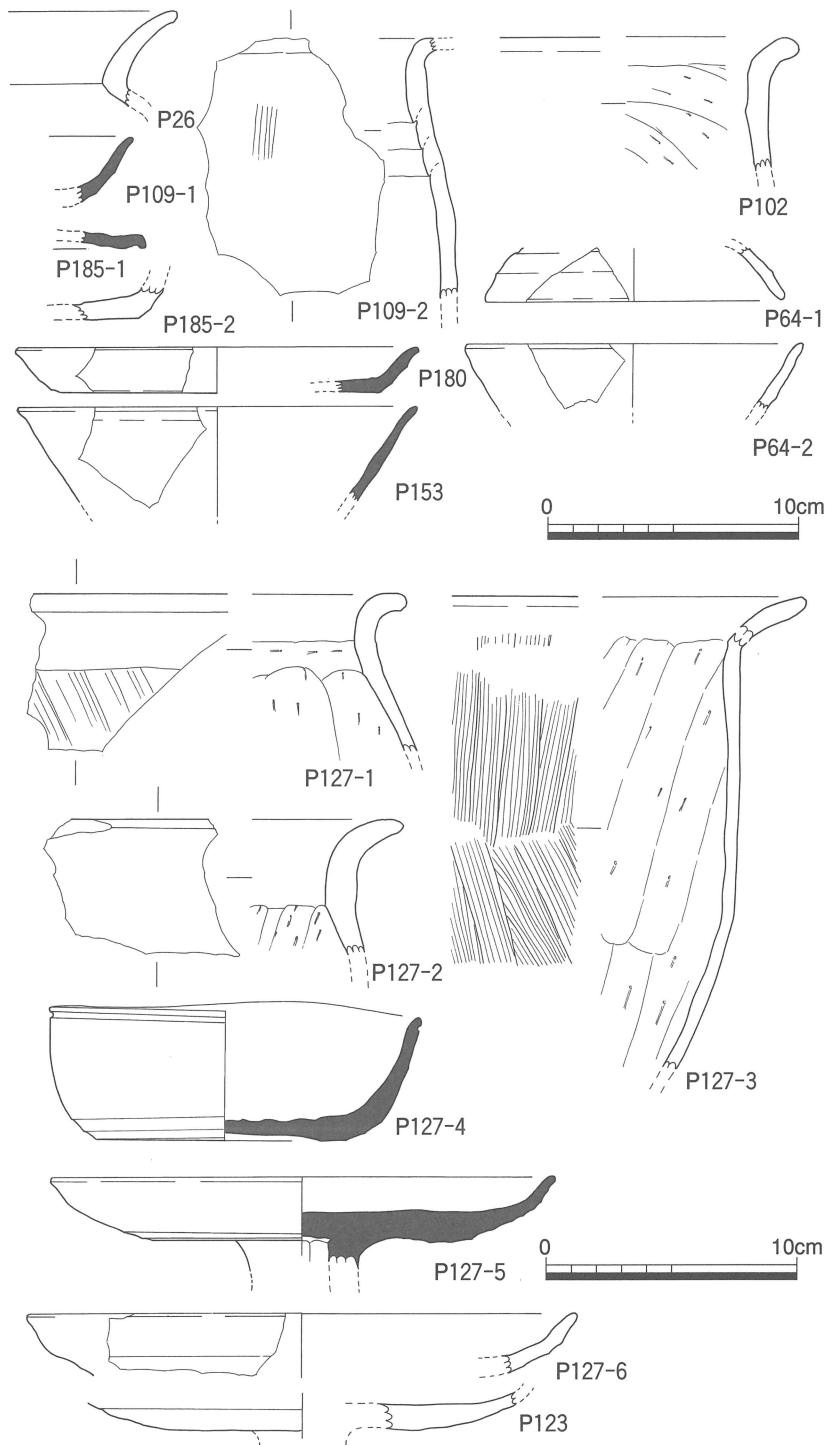
④の状況から新段階の建物に関わる柱を抜き取った穴に入れ込まれた遺物では破片が大きいことが理解できる。このことから、新段階の建物が廃棄された後に何らかの目的で整地作業が行われたと考えられる。

柱掘り方の遺物 (第29図)

P 64-1と**P 64-2**は、P 64柱掘り方覆土から出土した遺物である。**P 64-1**は土師器坏蓋口縁部片で、奈良時代のものと比べ深み(2.5~3cmに復元)があり、口縁部直径は復元で12cmほどである。内外面とも回転を利用した横ナデ調整による仕上げである。外面上部には回転ヘラ削りが確認でき、上部全体に回転ヘラ削りが行われたものと思われる。胎土には角閃石を含むが、それよりも石英粒子(1mm角)を多く含んでいる。浅黄橙色。**P 64-2**も土師器坏口縁部片である。比較的深みのある形態(復元器高3cm以上)で、口縁部直径は13.5cmほどに復元できる。内外面ともに回転利用の横ナデ調整による仕上げである。胎土には角閃石を多く含み、赤色砂粒(0.3~2mm大)もある。にぶい橙色。

P 102はP 102柱掘り方覆土から出土した土師器甕口縁部片である。ほぼ直立する胴部に短い口縁部が付く形態である。胴部は張らず、口縁部直径よりも胴部直径が小さくなるものと思われる。小片であるため口縁部直径の復元は行っていない。胎土には角閃石を多く含み、石英粒子(0.2~3mm)、雲母片粒子もみられる。浅黄橙色。

P 109-1と**P 109-2**はP 109柱掘り方覆土から出土した遺物である。**P 109-1**は須恵器高盤口縁部片で、比較的深み(2~2.5cm)のある形態に復元できる。小片であるため口縁部直径の復元は行っていない。内外面ともに回転を利用したナデ調整によって仕上げられているが、底部近くの外面には回転利用のヘラ削りがナデ調整前に施されている。胎土には黒色粒子(1mm)、白色粒子(0.2~2mm)



第29図 47区柱穴出土遺物(1/3)

を含んでいる。灰色。P109-2は甕頸部から胴部片である。やや胴部が張る形態で、口縁部は水平に短く開くものと思われる。胎土には角閃石を多く含み、石英粒子もみられる。浅黄橙色。

P153はP153柱掘り方覆土から出土した須恵器坏口縁部片である。口縁部直径は復元で16cm、深さは4cm以上で、深めの形態であるが、底径は小さめに復元できる。胎土はきめが細かく、黑色粒子を含む。色調は灰黄褐色もしくは黒褐色。対岸の肥後に所在する窯のものか？

P180はP180柱掘り方覆土から出土した須恵器高盤口縁部片である。口縁部直径は復元で16cm高さは1.7cmで、比較的浅く小さめの形態である。内外面は回転を利用した横ナデにより仕上げられているが、外面底部近くは回転を利用したヘラ削りがみられる。胎土には黑色粒子(0.2~1.0mm)、白色粒子(0.5~2.0mm)を含む。色調は灰白色。

P185-1とP185-2はP185柱掘り方覆土から出土した遺物である。P185-2は土師器坏(模倣坏)底部片で、底部直径は復元で8~9cmである。雲母、赤色砂、石英粒子(1.0~3.0mm)を含む。色調は浅黄橙色。P185-1は須恵器坏蓋片で、かえりが短く低い形態である。口縁部直径は復元で13~13.5cmである。胎土には白色粒子が多い。色調は灰白色。

柱痕出土の遺物 (第29図)

P26はP26柱痕出土の土師器甕口縁部片である。しっかりと頸部があり、口縁部が外反し、胴部の張る形態に復元でき、類例は矢房遺跡の古墳時代住居跡に確認できる。角閃石を多く含み、石英粒子(1~2.0mm)・白色粒子(0.2~1.0mm)もみられる。色調は浅黄橙色。

柱抜き取り穴出土の遺物 (第29図)

P123はP123柱抜き取り穴覆土から出土している土師器高盤坏部片である。口縁部に立ち上がる部分での復元直径は17cmで、坏底部の厚みは約1cmの重厚なつくりである。内面はミガキ調整であるが、外面はヘラ削りによる仕上げである。P127柱抜き取り穴出土の土師器高盤口縁部片(P127-6)と同様な形態である。胎土はきめが細かく、角閃石・雲母・白色粒子を含む。色調は橙色。

P127-1~6はP127柱抜き取り穴覆土に入れ込まれていた遺物である。P127-1は土師器甕口縁部片、頸部がしまり胴部は張る形態である。口縁部復元直径は22~23cm。内面は頸部近くには横方向のヘラ削りが確認でき、その後胴部にかけて縦方向のヘラ削りが行われる。外面は、斜め方向の刷毛調整が行われ、口縁部内外面はナデ調整。胎土は角閃石、雲母、赤色砂粒子(0.1~2mm)を含む。色調は浅黄橙色。P127-2は土師器甕口縁部片、頸部はしまりがなく、胴部の張りが少ない形態である。口縁部復元直径は22~23cm。胎土には角閃石を多く含み、石英粒子(1.0~2.0mm)、白色粒子(0.5~2.0mm)もある。色調は黄橙色。P127-3は土師器甕胴部片でも底部近くまで観察できる資料である。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部内面は頸部以下を長いストロークの縦方向のヘラ削り調整、胴部外面は縦方向の刷毛調整を二段にわけ施している。口縁部復元直径は22~24cmとなる。胎土観察では、角閃石と雲母を少量含み、石英・白色粒子(0.5mm~1.0mm)もある。にぶい橙色。P127-4は須恵器坏で、半分ほど残っている破片資料である。焼きひずみがある資料であり、口縁部は直立する形態と思われ、立ち上がりは丸く、底部中央は上げ底となる。底部は回転を利用したヘラ削り調整のあと、中央部分をナデ調整している。ヘラ削り調整は胴部下位まで達しており、口縁部にかけては回転利用の横方向のナデ調整である。口縁部外面には幅約2mmの溝が一条全周する。内面は回転利用の横方向のナデ調整である。口縁部復元直径は14cm、高さは5.3~5.4cm、底部復元直径は10.2cm(接地面)。胎土は混入物が多く、白色粒子(0.1~2.0mm)、黑色粒子(1.0~3.0mm)、石英粒子(5.0~7.0mm)を含む。色調は青灰色もしくは明青灰色、外面には自然釉が少々見られる。P127-5は須恵器高盤の破片資料である。脚部は折り取られており、口縁部は一部を残して削り取られている。口縁部はゆるく立ち上がり、端部は外反し、坏部底面は厚さ1cmで口縁部は薄く作られ、比較的浅い形態である。底部は上げ底となり、脚部は貼り付けられ基部は直径で4.2cm、厚みは1cm。脚部は粘土板を筒状にしたものであり、内面にそのつなぎ目が確認できる。外面は底部から口縁部下半まで回転利用のヘラ削り調整、口縁部内外面は回転利用の横方向のナデ調整。底部のヘラ削りは回転利用のナ

デ調整のあとに施され、脚部が取り付けられている。口縁部直径は20cm、坏部の深さは1.4cm。胎土は白色粒子（0.1～2.0mm）、黒色粒子（1.0～3.0mm）を含み、混入物が多く、5mm大のものもみられる。色調は全体的に青灰色であるが、紫灰色を呈する部分がある。脚部分が還元しておらず内部が明茶褐色を呈する。P127-6は土師器高盤口縁部片である。復元口縁部直径は22cm、坏部の深さは1.5cmほど。底部から立ち上がり部分にかけて回転利用のヘラ削り調整が行われ、内外面共に丁寧なミガキ調整が仕上げに施されている。胎土には角閃石、雲母、赤色砂（2.0mm）、石英粒子（0.5～3.0mm）が含まれる。色調は橙色。P123の土師器高盤坏部片と同一個体と思われる。P127覆土に含まれていた炭化物の年代は1300±40年BPである。（第8章自然化学分析85P参照）（竹中）

第9表 第6章47区柱穴検出遺物構成表

PIT	建物	柱掘り方	柱痕	柱抜き取り穴
2	①	土師器甕口縁部片1	土師器甕胴部片3	
5			小片3	
7		土師器坏片2・甕片1・小片5 竈片1・磔2	土師器坏片1 甕胴部片1・小片2	
13	②		土師器小片1	
16	①		土師器甕胴部片1	
26			土師器甕口縁部片1(第29図) 胴部片1・坏片1・磔1	
27		土師器甕口縁部片1 坏低部片1(ヘラ切り平底)小片2		
28	1			黒曜石
29		土師器小片		
37	②	土師器甕胴部片1		
52	①		土師器甕胴部片2・小片1	
53			弥生壺小片1・土師器小片1	
64	-	土師器坏片2・甕胴部片6・小片4 (第29図)		
74	⑤	土師器甕胴部片1・須恵器坏片1 土師器小片1		須恵器甕胴部片1
76		土師器小片2		
77		土師器甕胴部片2		
102	-	土師器甕口縁部片1(第29図)		
107	5		土師器坏片1・小片7	
109	①			土師器甕口縁部片1 須恵器高盤片1(第29図)
113			土師器甕胴部片4	
114		弥生壺胴部片1	安山岩磔1・鉄滓2	
120	④			土師器坏口縁部片2 甕胴部片2
123				土師器坏片1(第29図) 甕胴部片1
127				土師器甕口縁部片3 高盤1 須恵器坏片1 高盤片1
133				土師器甕胴部片2
140	①			土師器坏口縁部片1・甕胴部片1
142	-	土師器小片1		
145	③	土師器甕胴部片2		
153		土師器甕胴部片1 須恵器坏片1(第29図)		
180	-	須恵器高盤片1(第29図)		
184	-	土師器甕胴部片1		
185	-	土師器坏片1・甕小片3 須恵器坏蓋片1(第29図)		

※「建物」列について、○数字は新段階の建物、数字のみは旧段階の建物

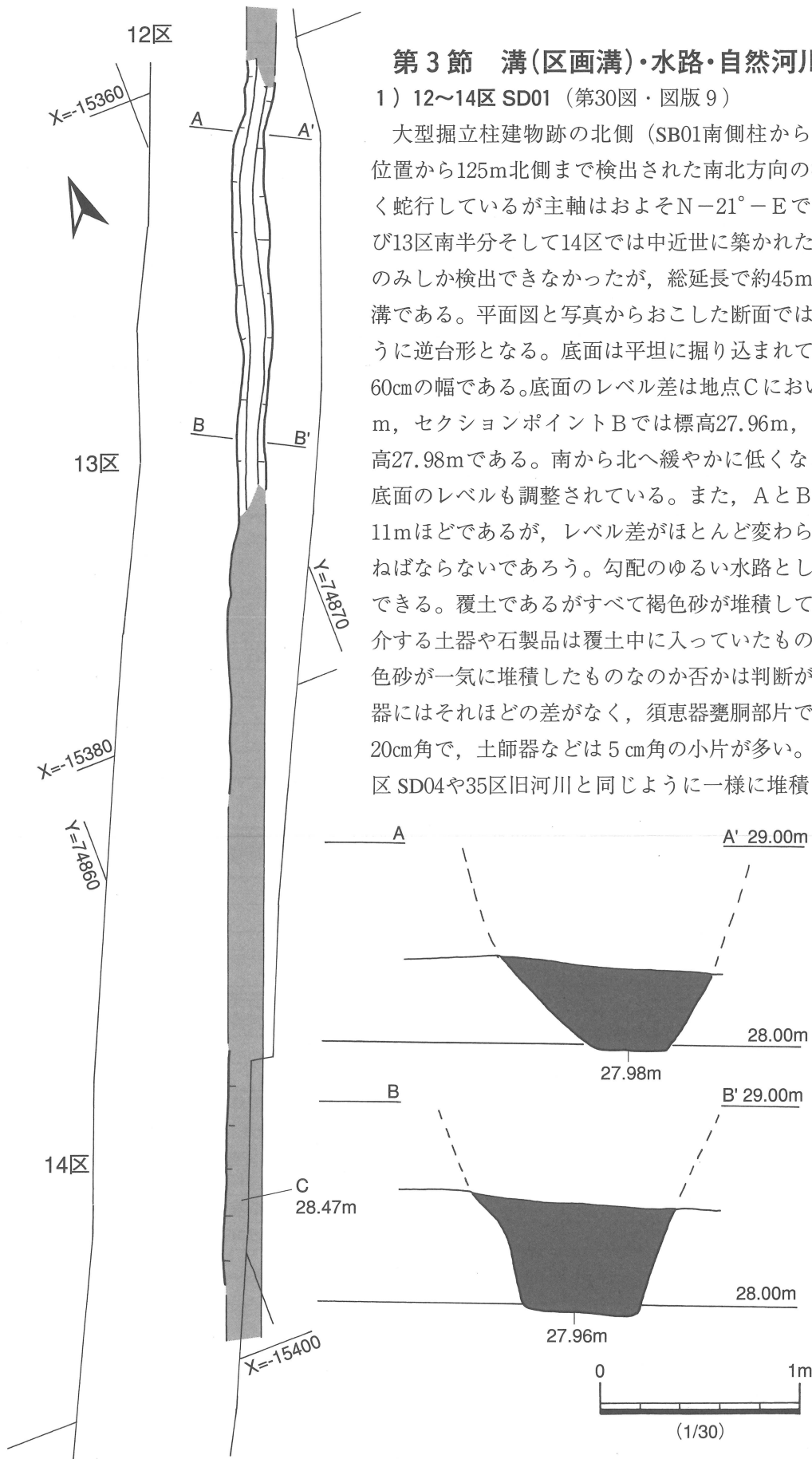
第3節 溝(区画溝)・水路・自然河川と出土遺物

1) 12~14区 SD01 (第30図・図版9)

大型掘立柱建物跡の北側 (SB01南側柱から北へ) 約75mの位置から125m北側まで検出された南北方向の溝である。ゆるく蛇行しているが主軸はおよそN-21°-Eである。12区および13区南半分そして14区では中近世に築かれた石垣により上場のみしか検出できなかったが、総延長で約45mを測る直線的な溝である。平面図と写真からおこした断面では、図に示したように逆台形となる。底面は平坦に掘り込まれており、40cmから60cmの幅である。底面のレベル差は地点Cにおいては標高28.47m, セクションポイントBでは標高27.96m, 同じくAでは標高27.98mである。南から北へ緩やかに低くなる地形に合わせ、底面のレベルも調整されている。また、AとBとは直線距離で11mほどであるが、レベル差がほとんど変わらない点も注意せねばならないであろう。勾配のゆるい水路としての機能が想定できる。覆土であるがすべて褐色砂が堆積しており、次項で紹介する土器や石製品は覆土中に入っていたものである。この褐色砂が一気に堆積したものなのか否かは判断が難しい。出土土器にはそれほどの差がなく、須恵器甕胴部片では最大のものが20cm角で、土師器などは5cm角の小片が多い。覆土の状況はC区SD04や35区旧河川と同じように一様に堆積している褐色砂

の中に遺物が入っている。遺物の集中的なレベルの検出は、行っていないが、一様に分布していた。底面には薄く灰色砂が堆積しており、当初は随時水が流されていた様子である。その上に褐色砂が堆積している。

(竹中)



第30図 12~14区 SD01平面図(1/200) セクション図(1/30)

2) 13・14区 SD01出土遺物 (第31～45図 図版18～31)

土師器 (第31～38図 図版17・24)

第31図～第35図までは土師器坏の資料である。形態的分析は、第9章第2節(103P)で行っている。

1は口縁部復元直径13cm, 高さ約3.8cm, 底部直径約8.0cm。口縁部の立ち上がりは比較的ゆるやかで、口縁端部は内側が平らで外側は丸い。内外面回転利用の横ナデ調整が施され、外面にはミガキが加えられる。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。

底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、手持ちのヘラ削りが外周を主体として施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂(0.2～2mm)・角閃石・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。

2は口縁部復元直径で12.5cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約6.5cm。口縁部の立ち上がりは比較的ゆるやかで、口縁端部は丸く、縁近くで強く押さえられ器壁が薄くなる(もっとも薄い部分では0.25cm)。

底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。

胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂(0.2～3mm)白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。

3は口縁部直径12.5cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はゆるく膨らみながら立ち上がり、口縁端部直前で強く押さえられ、外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。

底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。

胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂(0.2～2mm)白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。

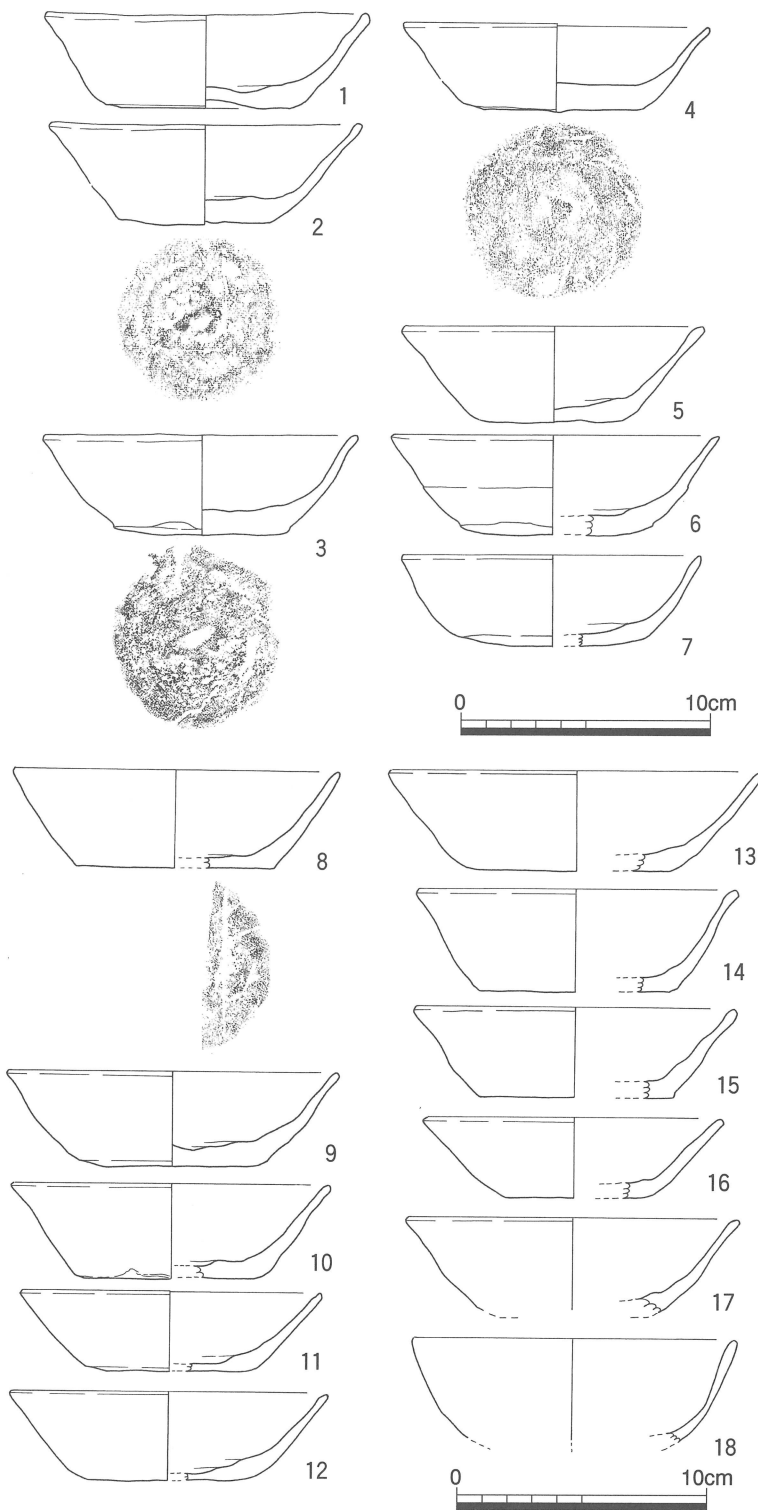
4は口縁部直径12.5cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はゆるく膨らみながら立ち上がり、口縁端部直前で強く押さえられ、外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。

底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。

胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂(0.2～2mm)白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。

5は口縁部直径12.5cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はゆるく膨らみながら立ち上がり、口縁端部直前で強く押さえられ、外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。

底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。



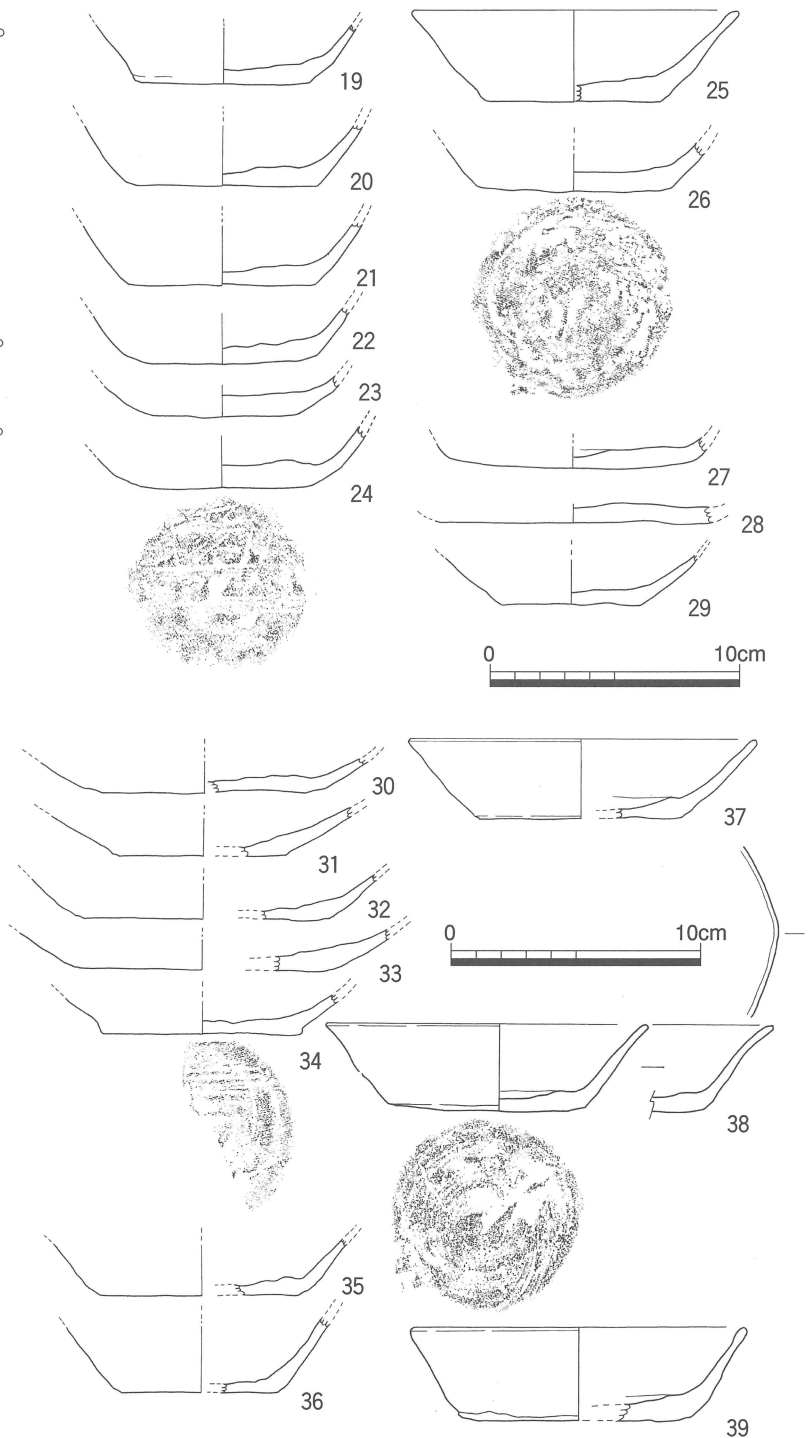
第31図 12～14区 SD01出土土師器・坏①(1/3)

部直径12.3cm, 高さ約3.4cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はゆるく膨らみながら立ち上がり, 端部は外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。底部外面中央には粘土塊が残る。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.2~0.5mm) 角閃石・雲母を含む。色調は浅黄橙色。5は口縁部復元直径で12.0cm, 高さ約3.8cm, 底部直径約6.0cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられ, 外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.2~3mm) 雲母・角閃石を含む。色調はにぶい橙色。6は口縁部復元直径13.0cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約8.0cm。口縁部は膨らみをもちながら立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.2~4mm) 雲母・角閃石を含む。色調は橙色。7は口縁部復元直径12.0cm, 高さ約3.7cm, 底部直径約7.5cm。口縁部は膨らみをもちながら立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂少々・石英・雲母・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。8は口縁部復元直径13.0cm, 高さ約3.9cm, 底部直径約8.0cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部は丸くおさめられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, 板状工具によるオサエが施される。胎土は混入物の多い精緻な生地で, 赤色砂・雲母・角閃石・白色粒子を含む。色調はにぶい橙色。9は口縁部復元直径13.2cm, 高さ約3.8cm, 底部直径約7.5cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられ, 外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.2~3mm) 白色粒子を含む。色調はにぶい黄橙色。10は口縁部復元直径12.8cm, 高さ約3.8cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられ, 外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.1~3mm) 雲母・角閃石を少々含む。色調は橙色。

11は口縁部復元直径12.0cm, 高さ約3.2cm, 底部直径約7.8cm。口縁部はほぼ真直ぐに立ち上がり, 端部は丸い。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は摩滅が激しく調整が確認できない。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂粒子・雲母・角閃石を含む。色調は橙色である。12は口縁部復元直径12.7cm, 高さ約3.6cm, 底部直径約7.0cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂・雲母・角閃石・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。13は口縁部復元直径15.0cm, 高さ約4.0cm, 底部直径約8.5cm。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部は丸くおさめられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後, ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で, 赤色砂 (0.2~3mm) が多く, 石英・角閃石・白色粒子を含む。色調は橙色。14は口縁部復元直径13.0cm, 高さ約4.1cm, 底部直径約8.0cm。底部直径が広めの, 深い形態となる。口縁部はなだらかに立ち上がり, 口縁端部直前で強く押さえられ, 外反

する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂（0.1～2mm）白色粒子・角閃石を含む。色調は橙色である。15は口縁部復元直径13.0cm，高さ約4.1cm，底部直径約7.8cm。口縁部はなだらかに立ち上がり，口縁端部直前で強く押さえられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後，ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で，赤色砂（1～2mm）角閃石・白色粒子を含む。色調はにぶい橙色である。

16は口縁部復元直径12.0cm，高さ約3.2cm，底部直径約6.0cm。11とほぼ同じ形態となる。口縁部はなだらかに立ち上がり，口縁端部は外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後，ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で，赤色砂粒子を含む。色調は浅黄橙色。17は口縁部復元直径13.4cm，高さ約3.7～4.0cm，底部直径約7.0cm前後。口縁部は膨らみをもちながら立ち上がり，口縁端部直前で強く押さえられ，外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後，ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い，精緻な生地で，雲母が多く，赤色砂粒子も含む。色調は浅黄橙色。18は口縁部復元直径13.0cm，高さ約4.0cm以上。形態的に1～17とは異なる特徴を持ち，口縁部下位で立ち上がりの傾斜が変化し，丸みのある深い形態となる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い精緻な生地で，雲母を多く含む。色調は浅黄橙色。19は坏底部片で高さ約3.0cm以上，底部直径約7.0



第32図 12～14区 SD01出土土師器・坏②(1/3)

cm。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、角閃石・雲母を含む。色調は橙色。**20**は坏底部片で、底部直径約7.5cm。内外面は回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂粒子（0.1~3.0mm）角閃石・雲母・白色粒子を含む。色調は橙色。

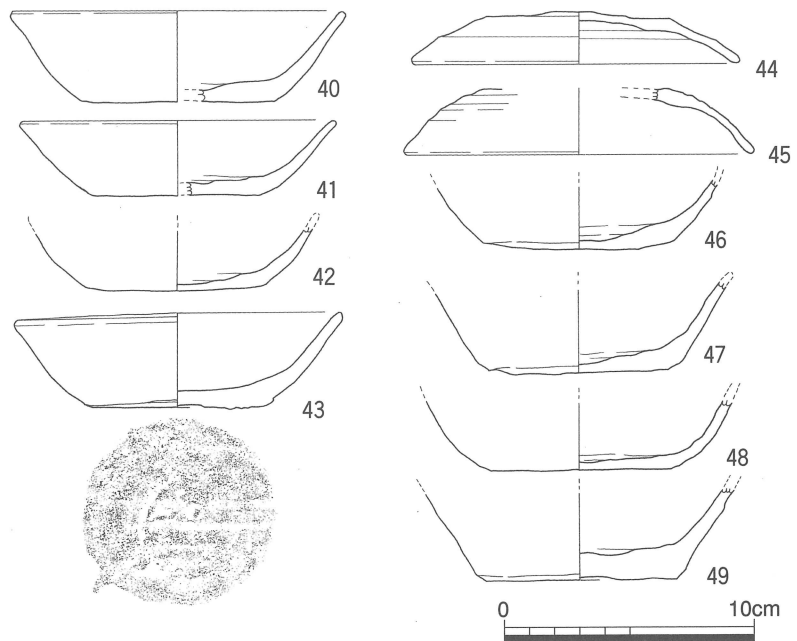
21は坏底部片で、底部直径約7.5cm前後。底部は胴部から張り出したように作られる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い、精緻な生地で、赤色砂粒子（0.2~3.0mm）白色粒子・角閃石も含む。色調は橙色。**22**は坏底部片で、底部復元直径約7.0cm。口縁部が失われている。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂粒子（0.2~2.0mm）、雲母を含む。色調は浅黄橙色。**23**は坏底部片で底部直径約6.0cm。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂粒子・角閃石・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色、内面は橙色。**24**は坏底部片で、底部直径約6.7cm。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、板状工具による圧痕が確認できるが、つくりは稚拙である。胎土は混入物の多い生地で、角閃石が多く雲母・赤色砂粒子も含む。色調は橙色。**25**は坏底部片で、口縁部直径は13.1cm、高さ約3.6cm、底部直径約7.0cm。口縁部はなだらかに立ち上がり、口縁部直前で強く押さえられる。内外面には回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、雲母粒子・石英・角閃石を含む。色調は橙色である。**26**はやや深く大きめの坏底部片。底部直径は復元で約8.0cm。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は赤色砂粒子（0.3~3.0mm）・白色粒子を含む。色調は橙色。**27**は広めの坏または皿とおもわれる底部片。底部直径は復元で9.0~10.0cm。接地面は丸みをもっている。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土は赤色砂粒子（0.2~2.0mm）・雲母粒子を含む。色調は橙色。**28**は須恵器の模倣坏底部片で、底部直径は復元で11.0cm以上。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しのあと、ナデ調整が施される。胎土は雲母粒子・赤色砂粒子（0.1~2.0mm）・白色粒子を含む。色調は橙色。**29**は小さく浅い坏底部片で、底部直径は復元で約5.6cm。内外面は回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で雲母を多く含み、白色粒子（3.0mm角もあり）も含む。色調は浅黄橙色。**30**は坏底部片で底部復元直径約8.0cm。胴部の立ち上がりは傾斜がゆるく、浅い形態に復元できる。内外面には回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、雲母粒子・白色粒子を多く含む。色調は浅黄橙色。

31は坏底部片で、底部復元直径約7.0cm。胴部はゆるい傾斜で立ち上がる浅い形態となる。内外面に回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土はきめが細かく、雲母粒子・白色粒子を含む。色調はにぶい橙色。**32**は坏底部片で、底部復元直径約10.0cm。胴部はゆるやかに立ち上がり、深さのない浅い形態に復元できる。内外面に回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調

整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土はきめが細かく雲母を多く含む。色調は橙色。**33**は坏底部片で、底部復元直径約10.0cm。胴部の立ち上がりはゆるい傾斜で、浅く広い形態に復元できる。内外面に回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂粒子（2.0～5.0mm）を含み5.0mm角の石英大粒なども確認できる。色調は浅黄橙色。**34**は坏底部片で、底部復元直径約8.0cm。口縁部は失われているが、胴部の立ち上がりはゆるい傾斜である。内外面に回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、板状工具による圧痕が確認できる。胎土はきめが細かく、雲母を含む。色調は橙色。**35**は坏底部片で、底部復元直径8.0cm。口縁部の立ち上がり方が緩く、浅い形態に復元できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土はきめが細かく、雲母片を多く含む。色調は浅黄橙色である。**36**は坏底部片で、底部復元直径約6.5cm。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土はきめが細かく、雲母・赤色砂粒子・角閃石を含む。色調は浅黄橙色。**37**の口縁部直径は復元で14.0cm、高さ約3.2cm、底部直径約8.5cm。口縁部は膨らみをもちながら立ち上がる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しが確認できる。胎土は混入物が多く、特に赤色砂粒子（2.0～5.0mm）・雲母粒子を含む。色調は淡黄色。**38**の口縁部直径は復元で14.0cm、高さ約3.5cm、底部直径約7.8cm。口縁部が特徴的で、一部を外側に広げ、「口」をつくりだしている。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。胎土は多くの赤色砂粒子（0.2～3.0mm）・角閃石（0.1～3.0mm）に白色粒子を含む。色調は橙色。**39**の口縁部直径は復元で13.5cm、高さ約3.7cm、底部直径約9.4cm。38や40などと比べ、底部直径がやや大きい形態となる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で角閃石・赤色砂粒子も含む。色調は橙色。**40**の口縁部直径は復元で13.4cm、高さ約3.6cm、底部直径約7.7cm。

口縁部はなだらかに立ち上がり、口縁端部直前で強く押さえられ、外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は角閃石・赤色砂粒子・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色。

41の口縁部直径は復元で13.0cm、高さ約3.0cm、底部直径約7.0cm。口縁部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、端部は薄くつくられる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面に

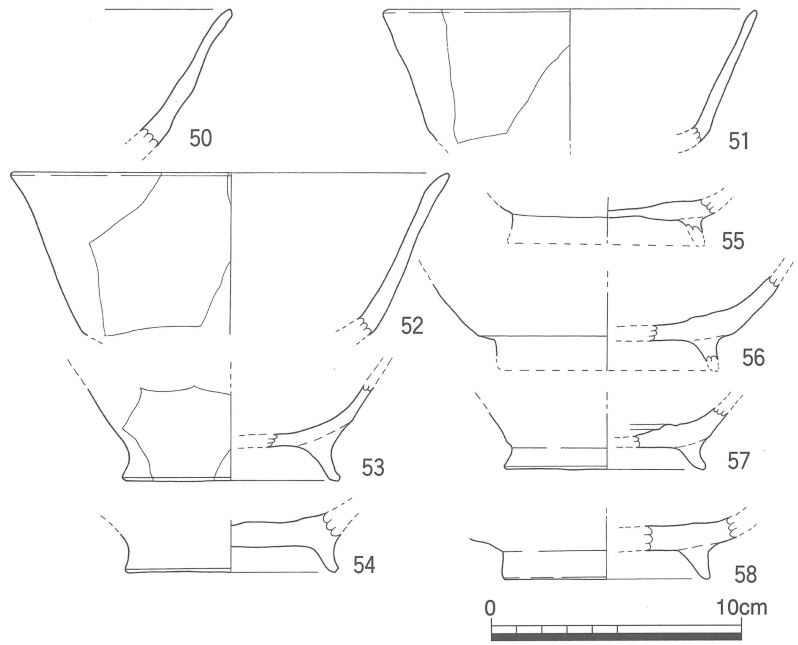


第33図 12～14区 SD01出土土師器・坏③・坏蓋(1/3)

はナデ調整による凹凸が観察できる。胎土は角閃石・雲母を含む。色調は浅黄橙色である。42は復元で高さ約3.0cm、底部直径約7.0cm。やや丸みのある形態である。口縁部は失われる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は雲母を多く含み、赤色砂粒子(0.1~2.0mm)・白色粒子(1.0~2.0mm)も含む。色調は橙色。43は口縁部直径13.1cm、高さ約3.8cm、底部直径約7.5cm。形態的に1や9に類似する。口縁部はなだらかに立ち上がり、端部は丸くおさめられる。内外面回転利用の横ナデ調整、底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、板状圧痕が確認できる。胎土は角閃石が多く、赤色砂粒子(0.2~3.0mm)を含む。色調はにぶい橙色。44は蓋で、口縁部直径は復元で13.0cm、高さ約2.1cm。蓋端部が傾斜する平たい形態で、須恵器の模倣品。外面は回転利用のヘラ削りが確認でき、内面は回転利用のナデ調整である。胎土はきめが細かく、雲母・白色粒子(0.2~1.0mm)・石英(2.0~3.0mm)を含む。色調は橙色である。45は蓋で、口縁部直径は復元で14.0cm、高さ約2.5cm。須恵器の模倣品であり、若干深めの形態。内面は回転利用の横ナデ調整が施され、天井部外面は回転利用のヘラ削りが確認できる。内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土は混入物の多い粗めの生地で、雲母・赤色砂粒子・白色粒子を含む。色調は浅黄橙色である。46は復元で高さ約2.5cm以上、底部直径約7.5cm。口縁部は失われるが、丸みをもった立ち上がり形態である。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。丸底気味の形態であるが、接地面は水平につくられる。胎土は角閃石・赤色砂粒子(0.2~3.0mm)・白色粒子(0.2~2.0mm)を含む。色調は橙色。47は復元で高さ約3.5~3.9cm、底部直径約7.5cm前後。口縁部は失われているが、端部で外反すると思われる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は角閃石・赤色砂粒子(0.5~3.0mm)・雲母・白色粒子(1.0~3.0mm)を含む。色調は橙色。48の底部直径は接地面で約7.5cm。口縁部は失われており、胴部が丸く立ち上がる形態となる。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。胎土は角閃石・赤色砂粒子(1.0~5.0mm)・白色粒子(0.5~2.0mm)雲母を多く含む。色調は浅黄橙色。49の口縁部直径は復元で12.5~13.0cm、高さ4.0~4.5cm。底部直径は8.0cm。口縁部は失われるが外反する。内外面回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しの後、ナデ調整が施される。胎土は混入物の多い粗めの生地で、赤色砂粒子(1.0~3.0mm)・角閃石を含む。色調は橙色。50の口縁部はなだらかに立ち上がり、口縁端部は外反する。深さは5cm以上と深い形態となる。内外面回転利用の横ナデ調整。胎土は混入物の多い粗めの生地で、角閃石・赤色砂粒子(1.0~7.0mm)・白色粒子を含む。色調は橙色。51の口縁部はなだらかに立ち上がり、復元で直径15cm、深さは5cm以上となる。内外面は回転利用の横ナデ調整。胎土は角閃石・赤色砂粒子(1.0~3.0mm大)を含む。色調は橙色。

52は坏口縁部片。外反する口縁部と深みのある形態が特徴的で、口縁部直径も復元では12.5cm、深さは6cm以上と大きめの形態。内外面は回転利用の横ナデ調整。胎土は角閃石・赤色砂粒子(0.3~2.0mm大)を含む。色調は橙色。53は高台付碗で、高台直径は約8.6cm。底部直径が広めの、深い形態となる。内外面は丁寧なナデ調整によって、滑らかな仕上がりとなっている。胎土は角閃石・雲母・白色粒子(1.0~2.0mm)を含む。色調は橙色である。54は高台付碗で、高台直径は約8.5cm。胎土は雲母・角閃石を含まず、赤色砂粒子(1.0~3.0mm)を確認できる。色調は橙色~浅黄橙色。55は高台付坏である。高台部分は欠損するが、底部がほぼ全周する資料である。復元では高台は直径8cm前後となる。胎土は角閃石・白色粒子(0.5mm)を含む。色調は浅黄橙色。56は高台付坏である。内外面

回転利用の横ナデ調整が施される。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土は、角閃石・赤色砂（1.0～2.0mm）を含む。色調は浅黄橙色。57は高台付碗で、高台直径は約8.0cm。高台の断面は踏ん張る形態となり、高さは約1cm。60以下と同様に胴部の立ち上がる部分に高台が貼り付けられている。内面は強いナデによる凹み、外面には回転を利用したミガキが確認される。胎土は雲母・白色粒子（1.0mm）を多く含む。色調はにぶい橙色。58は高台付坏で、高台直径は約8.2cm。高台の高さは約1.2cmで直に立っている。

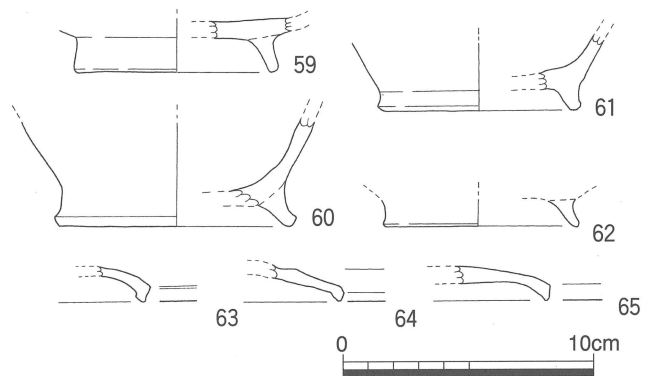


第34図 12～14区 SD01出土土師器・高台付坏①(1/3)

坏部底面に高台が貼り付けられており、60以下の形態とは異なる特徴を示す。胎土は角閃石・白色粒子（0.5～1.0mm）を含む。色調は浅黄橙色。59は高台付坏で、高台直径は約8.2cm。高台の高さは約1.5cmで、直に立っている。坏部底面に高台が貼り付けられており、60以下の形態とは異なる特徴を示す。角閃石・雲母少々を含む。色調は浅黄橙色。60は高台付碗で、高台直径は約9.6cm。高台断面は外側へ踏ん張る形態となる。胴部へ立ち上がる部分と高台部分の接合部が、ほぼ同じとなる形態である。胎土は角閃石・赤色砂粒子（1.0～2.0mm）・白色粒子（1.0～2.0mm）を含む。色調は橙色。

61は高台付碗で、高台直径は約8.1cm。胴部へ立ち上がる部分と高台部分の接合部が、ほぼ同じとなる形態である。胎土は雲母・赤色砂（1.0～5.0mm）を含む。色調は橙色。62は高台部分であるが、底部から剥がれたもの。高台直径は接地面端部で約8.0cm。胎土は雲母・白色粒子（0.2～1.0mm）を含む。色調はにぶい橙色。

63～65は土師器蓋。63の口縁部直径は15.0cm。外面には回転を利用したミガキが確認される。口縁端部のかえりは内傾し、端部の稜線がはっきり作り出されている。胎土は角閃石・赤色砂粒子（1.0～2.0mm）を含む。色調は橙色。64の口縁部直径は16.0cm。かえりは短く、断面三角形となる。天井部分にかけては凹凸がみられる。胎土は角閃石・赤色砂粒子（1.0～2.0mm）を含む。色調は橙色。65の口縁部直径は15.0cm。かえりは短く、断面三角形となる。胎土は角閃石・石英（1.0～3.0mm）を含む。色調は橙色。

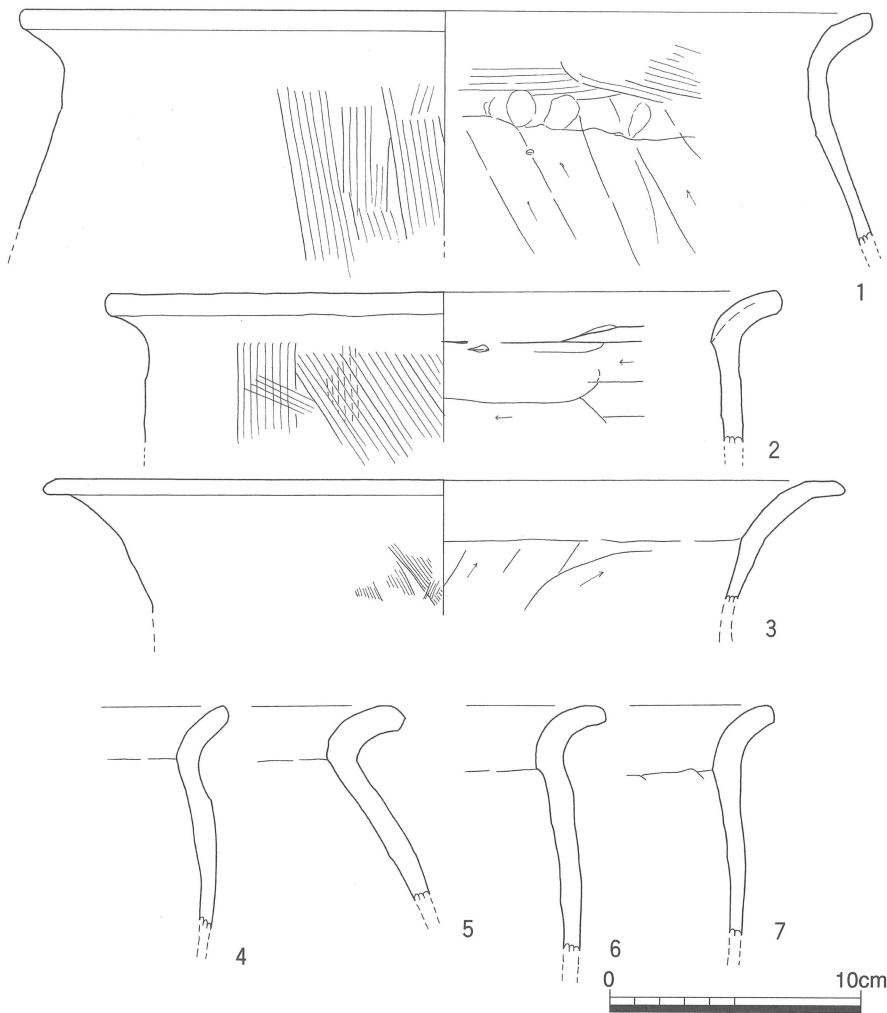


第35図 12～14区 SD01出土土師器・高台付坏②・坏蓋(1/3)

甕 (第36図 1～7)

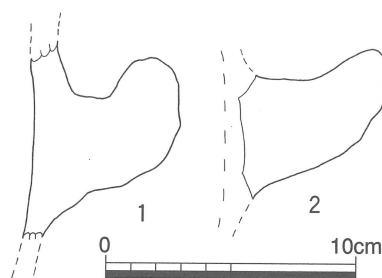
甕は完全な形に復元できるものではなく、すべてが破片資料である。口縁部は118点、胴部片はコンテナ一箱分、底部と思われるものは見られなかった。以下では特徴的な口縁部片を紹介していく。

1は復元で口縁部直径34cm, 残存高9cm。口縁部が比較的緩やかに広がる。胴部外面には縦方向主体の刷毛調整, 内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。口縁部内面には横方向の刷毛調整がみられるが, その上から回転を利用した横方向のナデが加えられる。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。色調は内外面ともに, にぶい黄橙色もしくは橙色。2は復元で口縁部直径27cm, 残存高6cm。口縁部が水平に広がり, 胴部が直立する。胴部外面には縦もしくは斜め方向の刷毛調整, 内面には横方向主体のへら削り調整が施される。口縁部内面から外面にかけて, 回転を利用した横方向のナデが加えられる。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。色調は内外面ともに, 橙色を主体とし, 一部黒色および明橙色である。3は復元で口縁部直径32cm, 残存高4.5cm。口縁部が広がり, 胴部は直立する。胴部外面には斜め方向主体の細かい刷毛調整, 内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。口縁部内面から外面には回転を利用した横方向のナデが加えられる。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。色調は内外面ともに, にぶい黄橙色を主体とし, 一部に黒褐色となる。4は復元で口縁部直径23cm, 残存高9cm。口縁部が比較的緩やかに広がる。胴部外面には斜め方向主体の刷毛調整, 内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。色調は内外面ともに, 浅黄橙色もしくは明褐色。5は復元で口縁部直径24cm, 残存高7.5cm。口縁部はすぼまり, 胴部が比較的緩やかに広がる。胴部外面には斜め方向主体の刷毛調整, 内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子・赤色砂を含む。色調は内外面ともに, にぶい黄橙色。6は残存高9.7cm。口縁部が水平に短く, 胴部が直立する。胴部外面には縦方向主体の刷毛調整, 内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。胎土には角閃石・白色



第36図 12～14区 SD01出土土師器・甕(1/3)

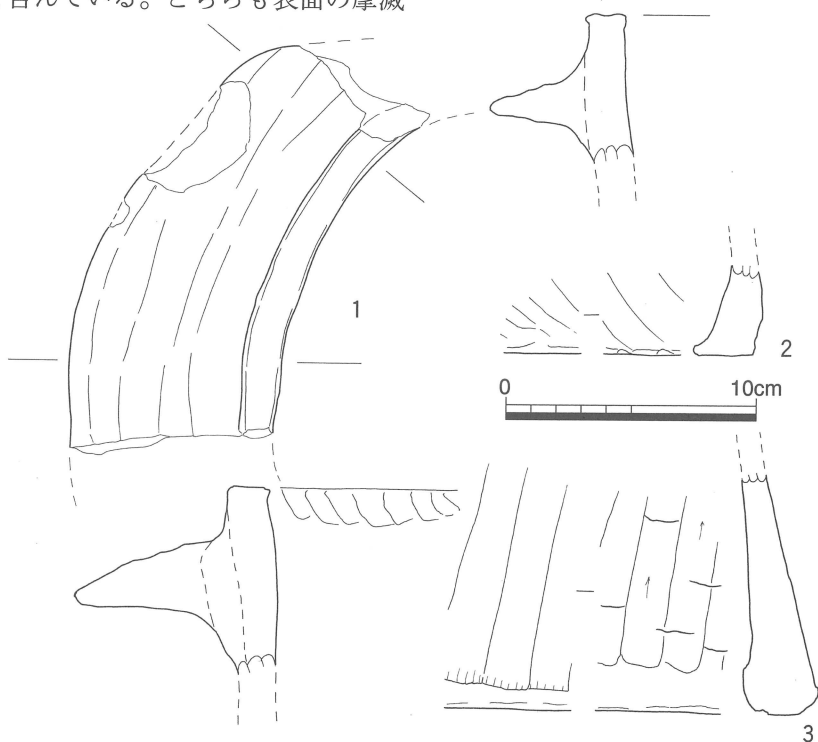
粒子・雲母を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色。7は残存高9cm。口縁部が短く、胴部が直立する。胴部外面には縦方向主体の刷毛調整、内面には斜め方向主体のへら削り調整が施される。胎土には石英・白色粒子・赤色砂を含む。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色もしくは橙色。



第37図 12～14区 SD01出土土師器・甑把手(1/3)

甑 (第37図 1～2)

1と2は把手であり、1はかえりが強く、2は緩やかである。いずれも胎土に大量の角閃石を含んでいる。どちらも表面の摩滅が激しく、表面の調整をしつかり観察できない。胴部内面はへら削りが施されるが、把手部分は指頭などによりナデ調整が行われている。色調は1が淡黄色もしくは浅黄橙色、2がにぶい褐色である。

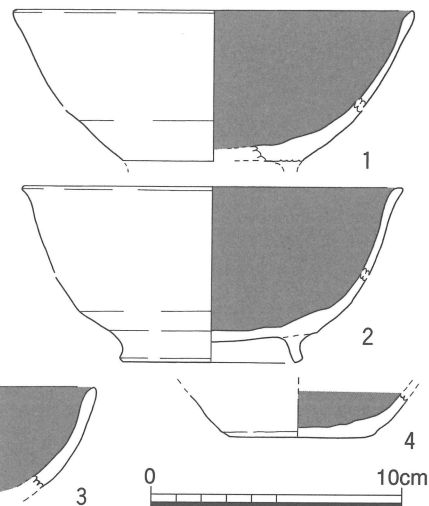


第38図 12～14区 SD01出土土師器・甗片(1/3)

移動式甗 (第38図 1～3)

1はひさし部分であり、内径は復元で30～34cm。残存高は8cmほど、ひさしの突出は最大で7cm、端部では4cmほどである。ひさし部分は大胆なナデ調整で貼り付けられており、ひさしの基部は胴部の上から粘土帯を貼り付けられている。口縁部端部内面は指頭による圧痕が規則的に施されている。胎土には角閃石が多く含まれ、雲母粒子や白色粒子(2～3mm)も含まれる。色調は浅黄橙色もしくは橙色である。2と3は裾部分の破片であり、2は薄く底部断面は水平であるのに対して3は厚みがあり底部断面が丸い。胎土には角閃石が多く含まれ、雲母粒子と白色粒子(1～3mm)を含んでいる。色調は2が内外面ともにやや暗めの橙色で、3が内面橙色、外面浅黄橙色。

2と3は裾部分の破片であり、2は薄く底部断面は水平であるのに対して3は厚みがあり底部断面が丸い。胎土には角閃石が多く含まれ、雲母粒子と白色粒子(1～3mm)を含んでいる。色調は2が内外面ともにやや暗めの橙色で、3が内面橙色、外面浅黄橙色。



第39図 12～14区 SD01出土土師器・黒色土器(1/3)

黒色土器A類 (第39図 1～4)

黒色土器A類の破片が20点ほど出土しているが、土師器や須恵器の総数と比べると少ない値である。そのため、今回の出土品の時期設定に対して大きな役割を果たすものではない。いずれも内面を黒色処理したもので、光沢を持

つものもあれば、摩滅し光沢をもたないものもある。破片はいずれも5 cm以下のもので、胎土や形態的特徴と接合関係から1と2が復元できた。3・4は単体の破片資料である。いずれも胎土には角閃石が含まれず、雲母粒子を多く含み、石英や白色粒子を含んでおり、上記で紹介してきた在地系の土師器の胎土とは一線を画するものである。1は高台部分が失われているが、計測値はいずれも復元で、口縁部直径16cm、残存高6 cm、高台貼り付け部分の直径は7.2cm。底部は厚めになるが、口縁部にかけて薄くつくられ、口縁部直下で強く抑えられ内面がくぼみ、端部は外に丸くつくられる。底部外面には、貼り付け高台を取り付ける部分(幅約1 cm)に細い溝が4条確認できる。底部内面には回転を利用した横ナデによる凹凸が残り、胴部下半では傾斜変換点が一点見られる。胎土は精緻で、雲母粒子を多く含み、白色粒子(1~3 mm)赤色砂(0.3~1 mm)石英(1~3 mm大)も含んでいる。色調はにぶい黄橙色。2は口縁部が強く外反する点の特徴である。計測値は口縁部が復元で15.2cm、高台部分が直径7.4cm、高さ1.2cm。1と同じく胴部以上は薄くつくられ、口縁部は端部が強く外反する。胴部はやや丸みをもって立ち上がり、高台はやや外にはる程度で直立し、端部は外側に張り出している。1と同様に胴部の立ち上がりでは傾斜変換点が1点見られる。内外面丹念にナデが加えられているが、摩滅のため細部の調整の状況は不詳である。胎土は1と同様の含有物の状況であり、精緻である。色調はにぶい橙色とやや赤が強くなる。3は器壁の厚い部類で、特に口縁部端部は厚くつくられる。このような特徴を持った碗も存在するのであろう。4は底部復元直径6 cmほどの坏の底部片である。内面は摩滅が激しいが、黒色処理されているものと思われる。胎土は1や2ほど精緻ではないが、含有物には角閃石が含まれず、1と同様の含有物の状況である。色調はにぶい黄橙色。

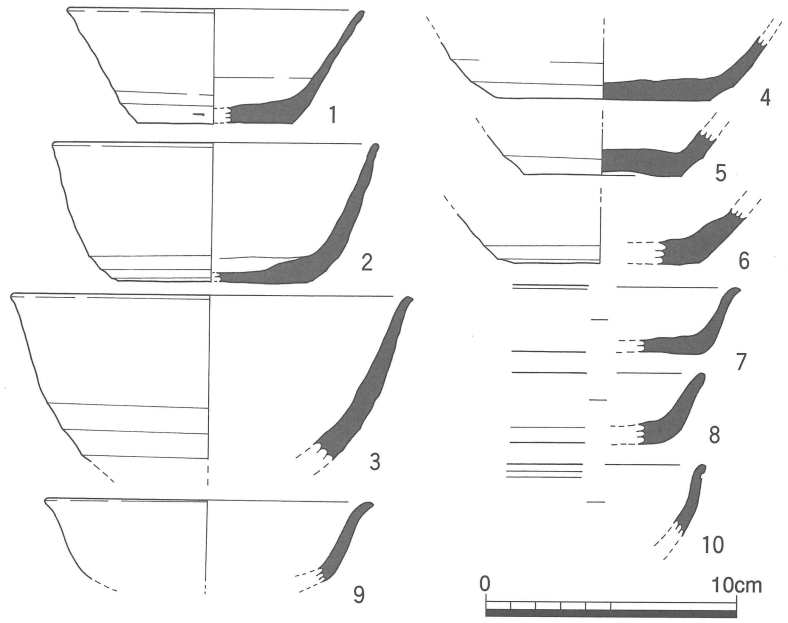
須恵器 (第40~44図 図版26~30)

坏 (第40図 1~6)

第40図1~6は坏の破片資料である。いずれも復元実測であり、全体的な傾向として深みのある形態であり、外面に見られる回転ヘラ削りは胴部下半まで達するものがほとんどである。いずれも底部内面には横ナデによる凹凸が確認できる。

1は口縁部復元径12~12.6cm、高さ4.6cm、底部復元径6.2~6.8cm。胴部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁部近くでは器壁が極めて薄く(2~2.5mm)つくられる。内面から口縁部外面にかけては回転利用の横ナデ、胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。底部はヘラ切り離しのあと、ナデ調整。胎土は混入物の少ない精緻なものであるが、焼成があまく内部まで還元していない。色調は自然釉が口縁部から内面にかかっており、そのほかは灰白もしくは灰色である。2は口縁部復元径13cm、高さ5.7cm、底部復元径7.2~7.8cm。胴部から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、口縁部近くは直線的である。内面から口縁部外面にかけては回転利用の横ナデ、胴部外面下1/4は回転利用のヘラ削り。底部はヘラ切り離しのあと、ナデ調整。胎土は白色粒子(0.5~3 mm)黒色粒子(0.5~1 mm)。色調は自然釉が外面全体にかかり灰色もしくは灰白色、内面は灰黄褐色である。内面にも自然釉が径2.5cmほどでかかっている。3は口縁部復元径16cm、高さ6.6cm以上。胴部から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、口縁部端部は外反する。内面から口縁部外面にかけては回転利用の横ナデ、胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。胎土は白色粒子(0.7~2 mm)黒色粒子少々。色調は自然釉が口縁部から内面にかかり、見込み部分にたまっており、外面は灰褐色、内面は暗赤褐色。4は残存高2.6cm、底部復元径8.4~8 cm。内面は回転利用の横ナデ、胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。底部はヘラ切り離しのあと、ナデ調整。胎土は白色粒子(1~2 mm)黒色粒子(1~2 mm)が多い。色調は灰白もしくは灰色である。5は残存高2.0cm、底部復元径6.4cm、若干の上げ底である。内面は回転利用

の横ナデ、胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。底部はヘラ切り離しのあと、ナデ調整。胎土は白色粒子（1～2mm）が多い。色調は灰白もしくは灰色である。6は残存高2.4cm，底部復元径8cm。内面は回転利用の横ナデ，胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。底部はヘラ切り離しのあと，ナデ調整。胎土は白色粒子（1～2mm）が多い。色調は外面が灰白，内面は灰色。**高盤・高坏**（第40図7～9）



第40図 12～14区 SD01出土須恵器・坏(1/3)

7は高さ2.7cm，口縁部復元径8～9cm。内外面ともに回転利用の横ナデ。底部も回転利用

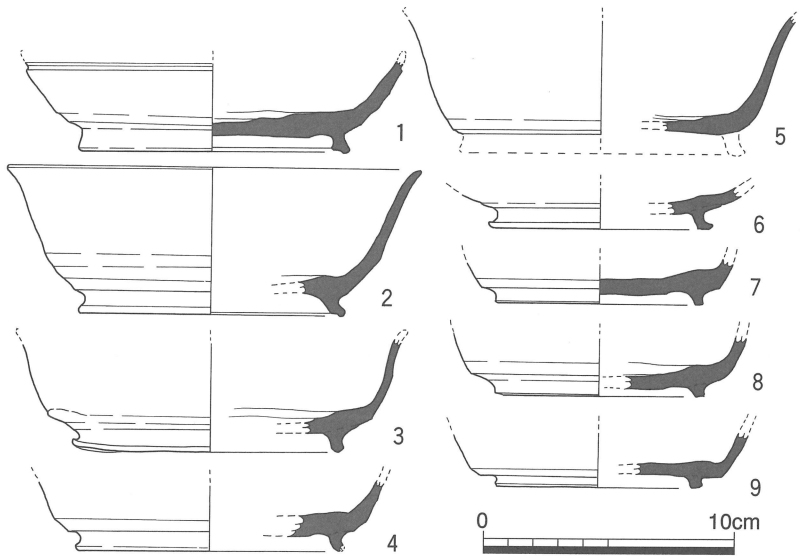
の横ナデ調整。胎土は白色粒子（1～3mm）黑色粒子（1～2mm）を含む。色調は灰色で，内面は自然釉がかかり灰色である。8は高さ2.8cm。内面は回転利用の横ナデ，胴部外面下半分は回転利用のヘラ削り。胎土は白色粒子（1～3mm）が多く，焼成が悪く内部は完全に還元していない。色調は灰色であり，内面ににぶい赤褐色となる部分がある。9は残存高3.1cm，口縁部復元径13.0cm。口縁部端部が外反する特徴的な資料である。内外面ともに回転利用の横ナデ。胎土は白色粒子（1～2mm）黑色粒子（1mm）を含む。色調は灰色である。

坏口縁部片（第40図10）

10は口縁部端部外面に溝をもつもので，残存高は2.8cm。丸みをもって立ち上がっており，口縁部はほぼ直立する。胎土は白色粒子（1～0.5mm）を含み，色調は灰色である。

高台坏（第41図1～9）

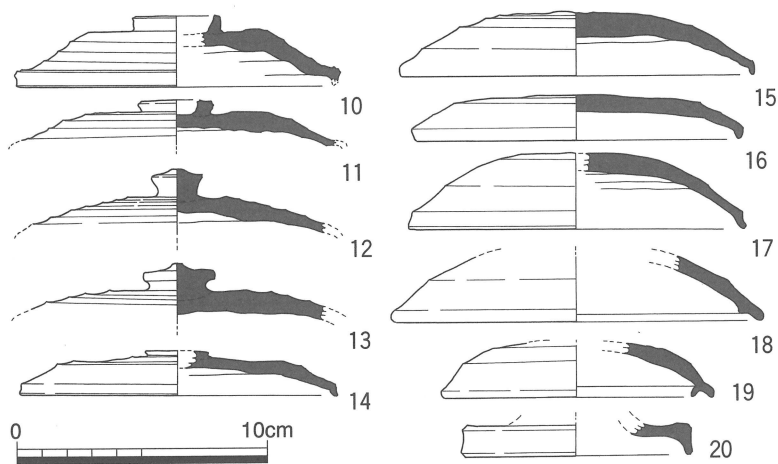
第41図1～9は張り付け高台をもつ坏である。図示したものの他に7のような小型の低い高台の破片資料が5点出土している。10～20は坏蓋の資料で図示したものの他に，10と同じような形態のものが15点，かえりが内部につく19のようなものが1点，天井のみの破片資料が3点出土している。1は残存高3.6cm，口縁部復元径15～15.5cm，高台直径10.8cm（高さ0.7cm），40%ほどの残存率。口縁部端部



第41図 12～14区 SD01出土須恵器・高台付坏(1/3)

外面には一条の溝が施され、浅い形態で、高台畳み付け部分に一条の溝を持つ。高台は外側に張り出す形態である。底部から胴部下半は回転を利用したヘラ削りが施され、そのあと高台を貼り付ける。底部内面には回転利用の横ナデ調整の凹凸が残る。胎土は白色粒子（0.5～3mm）石英（2～4mm）を含む。若干焼成があまく、未還元の部分が残る。色調は赤灰とにぶい黄褐色となる部分に別れ、内面はにぶい橙色である。胎土・色調ともに荒尾産などの特徴をもつ。2は高さ5.8cm、口縁部復元径16.5cm、高台直径10.5cm（高さ0.8cm）、30%ほどの残存率。口縁部端部は外反し、比較的深い形態で、高台畳み付け部分に一条の溝を持つ。高台は外側に張り出す形態である。底部から胴部外面下半にかけて回転利用のヘラ削り、口縁部にかけては回転利用の横ナデ調整。胴部内面には回転利用のナデによる凹凸が残る。胎土は白色粒子（0.1～0.3mm）黒色粒子（0.1～1.0mm）を含む。焼成は良好で、色調は灰色で部分的に褐灰色。3は高さ復元で5cm、口縁部直径復元で15.6cm、高台直径約10.7cm（高さ0.7cm）、20%ほどの残存率。口縁部端部は外反し、深さのある形態で、胴部以上の器壁が薄く仕上げられる。胴部外面には底部からの回転利用のヘラ削りがみられ、内面は回転利用のナデ調整である。高台部分に一部ゆがみが見られるなど、決してよいつくりではない。高台は断面方形に近いが、若干外側に張り出している。胎土はやや粗めで、白色粒子（0.1～3.0mm）黒色粒子（0.1～3.0mm）を含む。色調は青灰色。4は残存高2.7cm、高台直径は復元で10.6cm（高さ0.7cm）、10%ほどの破片資料。外面に回転を利用したヘラ削りが行われ、高台が貼り付けられる。高台断面は若干外側に張り出している。胎土は黒色粒子（0.3～5mm）が多く、5mm台の大きさのものが目立つ。焼成不良で内部まで還元していない。色調は灰白色で内部は明るい灰白色。5は高台が剥がれ失われているが、残存高4.5cm、復元で口縁部は16cm、高台基部の直径は11cm、10%ほどの破片資料。口縁部が外反し、深い形態である。胴部外面は下半に回転利用のヘラ削りが残り、ほかには内外面ともに回転を利用した横ナデである。胎土は粗めで、黒色粒子（0.1～0.3mm）白色粒子（0.1～0.3mm）を含む。色調は灰白色。6は精緻なつくりが特徴で、底部・高台ともに非常に薄く作られる。残存高1.7cm、高台復元径9.0cm、10%ほどの破片資料。高台端部などにみられる稜線はしっかり作り出されている。胎土は精緻で白色粒子（0.3～1.0mm）を含む。色調は明青灰色から暗紫色で、内部は灰赤色。焼成良好。

7～9は高台が低く小型の坏に復元される。7は残存高1.8cm、高台直径8.2cm（高さ0.4～0.5cm）、35%ほどの破片資料。回転利用のヘラ削り調整が外面にみられる。胎土は白色粒子（0.3～7mm）黒色粒子（0.5～1mm）を含み、色調は灰色である。8は残存高2.4cm、高台復元径8.4cm（高さ0.5cm）。胴部下半まで回転利用のヘラ削りが施されており、内面には回転利用の横ナデの凹凸が残る。胎土には



第42図 12～14区 SD01出土須恵器・坏蓋(1/3)

は白色粒子（0.3～2mm）黒色粒子（1～3mm）を含み、色調は灰色。外面には自然釉がかかり、やや黒っぽくなる部分もある。9は残存高2.2cm、高台直径復元で4.2cm（高さ0.4～0.5cm）。底部外面に回転利用のヘラ削り調整が残り、高台断面は方形に近い。胎土には白色粒子（0.3～2mm）黒色粒子（1～2mm）を含み、色調は灰色。坏蓋（第42図10～19）

10・11は輪状つまみの貼り付け

られた資料で、天井部が盛り上がる高さのある形態で、端部のかえりは断面三角形である。天井部外面に回転利用のヘラ削りが行われ、口縁部近くは回転利用の横ナデ調整である。内面には回転利用の横ナデ調整の凹凸が残る。**10**は口縁部直径復元で約13cm、高さ約2.8cm、35%ほどの破片資料。胎土には白色粒子(0.3mm)を含み、焼成不良である。色調はにぶい赤褐色。**11**は残存高約1.8cm、口縁部直径は復元で12.6cm以上、50%ほどの破片資料。胎土は白色粒子(1.0~2.0mm)赤色砂粒子(0.3~2.0mm)を含み、色調は灰色。焼成不良でつまみ内部は還元していない。**12**・**13**は宝珠型をつまみをもつ資料で、**10**や**11**と同じく点上部が盛り上がる深さのある形態である。調整は天井部外面に回転利用のヘラ削り調整、内面から口縁部外面は回転利用の横ナデ調整。**12**は残存高約2.6cm、口縁部直径は12cm以上、つまみは高さ1.3cm(直径2.1cm)、15%ほどの破片資料。胎土は精緻で白色粒子(0.5~2mm)を含む。

色調は灰白色。

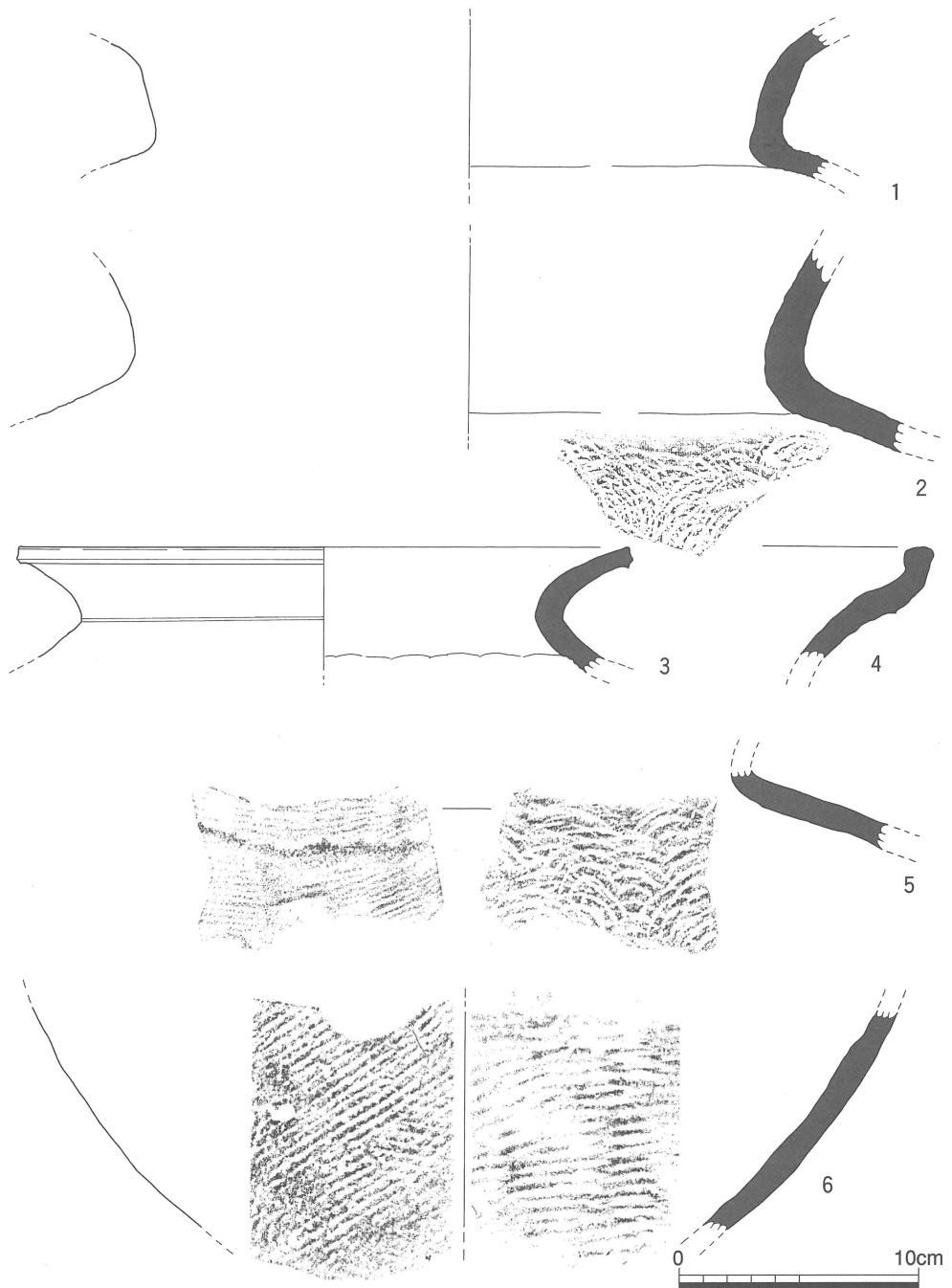
13は残存高2.5cm、口縁部直径は12cm以上、つまみ高さ1.1cm(直径2.9cm)。

胎土は白色粒子(2~3mm)黒色粒子(2~3mm)を含む。色調は灰白色で、

外面全体に自然釉がかかる。**14**は扁平なつまみを有する資料で、高さ約1.8cm、口縁部直径約

12.6cm、つまみ高さ0.3cm(直径2.5cm)、ゆがみの少ない資料。

天井部外面全体に回転利用のヘラ削りを施し、内面は回転利用の横ナデ調整。かえりは比較的しっかりとしており、外側に張り出している。



第43図 12~14区 SD01出土須恵器・甕(1/3)

胎土は白色粒子（0.5～3mm）を含み、色調は青灰色。15～17はつまみのつかない資料で、15および17は深さのある資料である。天井部外面に回転利用のヘラ削り、内面と口縁部までは回転利用の横ナデ調整。かえりは断面三角形でしっかりしている。15はゆがみがある資料で、高さ約2.5cm、口縁部直径約14.2cm。胎土は白色粒子（1～3mm）が多く、黒色粒子（0.5～2mm）を含む。色調は灰白色から灰色である。16はゆがみの少ない資料で、高さ約2.8cm、口縁部直径13.2cm。胎土は白色粒子（0.2～3mm）黒色粒子（2～7mm）を含み、色調は灰色。17は高さ3cm、口縁部直径13.5cm。胎土は角閃石、黒色粒子（0.5～2mm）白色粒子（0.3～1mm）を含み、色調は灰白色。18・19は内面にかえりを残すタイプの資料で、天井部が高く深みのある資料である。天井部外面は回転利用のヘラ削り調整、内面から口縁部にかけては回転利用の横ナデ調整。18は残存高2.6cm、口縁部直径15cm、胎土には黒色粒子（0.3～5mm）を含む。色調は外面全面に自然釉がかかり、内面は灰白色である。19は小型のタイプで残存高2.3cm、口縁部復元直径は10.9cm。胎土には白色粒子（0.3～1mm）を多く含み、色調は灰白色。20は短頸壺の蓋、もしくは高坏脚部と思われ、つまみがつくものと思われる。残存高1.2cm、口縁部直径9.2cm、かえりの高さは約0.7cm。胎土は緻密で白色粒子（0.1～0.3mm）黒色粒子（0.1～0.3mm）を含む。色調は灰色。

甕（第43図1～5）

1は頸部復元直径26cm、頸部高さ5cm以上の口縁部が失われた破片資料である。頸部内面と肩部外面に自然釉がかかり、焼成不良で内部は完全には還元していない。頸部外面は回転を利用した横ナデ調整で、肩部外面には格子目の叩き、内面には同心円の当て具痕がみられる。頸部内面以上は横ナデ調整である。接合は図の点線で示すとおり、肩部の粘土の先に頸部をのせるようにしている。胎土には黒色粒子（0.5～2mm）白色粒子（0.5～1mm）を含む。色調は灰白色。2は頸部復元直径28cm、頸部高さ7cm以上の口縁部が失われた破片資料である。頸部内面と肩部外面は回転を利用した横ナデ、肩部外面に格子目の叩き、内面に同心円の当て具痕がみられる。胎土は白色粒子（1～3mm）が多く、ついで黒色粒子（1～2mm）を含む。色調は灰色もしくは灰白色。3は1や2より小型のもので、復元で口縁部直径26cm、頸部直径20cm。肩部外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕跡。頸部内外面は回転利用の横ナデ。胎土に白色粒子（2～3mm）黒色粒子（3mm大）を含み、色調は灰色もしくは灰オリーブである。口縁部内外面に自然釉がかかる。4は口縁部外面に格子目叩きの見られるもの。直径は復元で36～39cmと大型である。表面の摩滅が激しく、焼成も不良である。胎土に黒色粒子（1～3mm）を含み、色調は灰白色である。5は肩部の破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕がみられる。形態的に3と同じような大きさかと思われる。胎土は混入物の少ない精緻なもの。色調は浅黄橙色である。6は胴部下半の資料で、外面に平行叩き、内面に平行当て具痕を有する。胎土に白色粒子（1～3mm）を含み、色調は浅黄橙色であり、焼成不良で内部まで還元していない。

壺（第44図1～4）

1は長頸壺の口縁部片で復元直径15.2cm、頸部復元直径7.2cm、頸部高さ9.2cm。内外面とも回転利用の横ナデ調整であるが、内面には粘土紐の凹凸や接合部分が残る。胎土には混入物が少なく精緻なものである。色調は完全に還元していないために灰黄色となる。2も長頸壺の口縁部片で比較的稜線がはっきりしており、復元直径は16.4cm。内外面とも回転利用の横ナデ調整である。胎土には混入物が少なく精緻なもので、白色粒子（1～2mm）黒色粒子（0.5～3mm）を少々含む。焼成は良好で完全に内部まで還元しており、色調は灰白色である。3は長頸壺の口縁部片で端部は失われている。復元直径では16cm以上となり、頸部復元直径8cm、頸部高さ10cm以上に復元できる。内外面とも回転利用の横ナデ調整であるが、内面には粘土紐の凹凸や接合部分が残る。胎土には白色粒子（0.5～3mm）